新後拾遺和歌集

特別
へ4
8099
20

ヘ4
8099
20

早稲田文庫

<2001-043>

しきしまややまとみことのことはのあめつ
ちひらけしよりおこりそのもとゝひさしく神代
よりつたはりきたりてはひあは玉のうすなれ
ひとゝなりみの歳すさのをのみことい八雲のことはれ
まつりしその色紙つりみそりあまりひともしを
人のよそてあそひとして私をめてとりそうやむあや
ちよりよあたらすみをあつれかひ月残らすぬれもひ
はらふかうれすとひふことを例にかはりかさし
のいさきてよそんになしひ常たにすさむわやし
けう都をゆきくものみちなるをおりと残し出
されたる人は風をもよふちりひらかれ青き紀やあ

と明りいたるをはふるけの志なしれ残る我らみまうそ
よろこひいみかり色れひよりの御門世のおさまれ
ゆをとしり民のかきぬつゝをはれをひたもふ衣とみ給
よふよれつゝやいまわか素多のたよろしあすこと
十と残あまり二くりのきもりなむ明りまてる
あまを歳まかんあるしきよりよくきれたりをかう
ちらくかな紀ためしみきゝらくせよし数にけらりを
志ぎしなの為をたぬこゝ人をなぐ白縁を極
つり続りなるをのまそてかゝまれともなるをなら花
まよ三残いれる時とみせり志ぬれとあ須紀実大為
軍をれあはいまうち意のさいとのことまれし哉

おさめらる常のおとろへしをなおしてかなふ八す
ことをまことり御はゝ古今のあとをわすさをたまは後ゝよゝ
君もこれをもちゐをあらためはりなからへしまより
て権中納言藤原郷後鳥重におほせふかくり
いまふたゝひさてならく代あつめえらしめ給ひ綿
れらにはむかし白玉は海にれるすくなく難波のこゝ
まやくのしわかきこあさ事絵もあれ色らすしら
いあをしたひろくしておなお給ひあいめとそまつ
しし文治のり花山世の皇太后宮大夫俊成みことの
のりをうけ絆りしゝり延文の時にはいへ
いろはれ代はえてひとゝ絶さる勅撰すくられ家

らりてはすといふことわりいまの世のちすところくへの御
ぶすところ給はことふみちのひしおとしふ色し四
の時のりそあそびらりくさしてふいふるまてそのちす
たゝされぬちりなりけるて
新後拾遺和歌集にいふ古の井はすめ給ふらしなく
こゝろはんきらはあとをうるてえらひ給へめゝる
なる一小倉の治承代のつら色そふかきのよこひ
まあされりみちさのこゝの松霜残ゝさかりのち
しれなき代てかりちてはえ久への摂政は清く寺
又ちとのりをうふり文和の相府かされ書う記伐
のこせりこれみえはかきとおりてはすゝうちの代也

されてたまはりけんさしとゝめてけり永徳二の
としやよひのとをかあまりになむしるしとゝめけ
はかなくはつめえられねとも、おほはらやまのうせたる
川ちかきのあとゝはひさしきみちのまゝちと残
のあとをれなさけあるしかはなきとしかり

新後拾遺和歌集巻第一

春歌上

立春の心をよみ侍ける

前大納言為定

あまの川かすみそめてひさかたの空にけふより春やきぬらむ

春のはしめのうた　源頼朝

立かへる色もかすみにしるしはやゝまのすそのゝ雪のむらきえ

百首歌めしけるついてに

順徳院御製

ことはりやおのか春なる津の国のなにはのいそへに霞たつらし

延文二年後光厳院に百首歌奉りける時

霞を

太政大臣

春の色はいやとをとみにかすむらんいつ世の神のゆきそめし

建仁元年五十首歌たてまつりける時

前中納言定家

ふしのねやなかはかすめるあさなきに山も霞てうら風そふく

題しらす

壬生忠岑

河のせのひかりハかすみ来て春きたりけり霧のたつ名

千五百番歌合に

参議雅経

きのふまてこほりし空の春風にかすみわたれるみよしのゝ山

正治二年後鳥羽院に百首歌奉りける時

後京極摂政前太政大臣

高嶺にはところもわかすさくらはな　松の葉しろくみゆるあけほの

弘長元年後嵯峨院に百首歌たてまつりける時

春曙　　前大納言為氏

かすみわたるをのへの花に山風に　たちかへりさくらしく雪はちりつゝ

嘉元元年仙洞にて二十首歌講せられしついてに

後光厳院御製

なかめやる山の端しろき花の雪　やかてくもらぬ春のあけほの

百首歌たてまつりし時山霞を

左大臣

山深きかすみのおくもしられけり　とやまのかすみ春は見えけり

惟明親王家の十五首歌に

従二位家隆

ふしみ山すその里の冬かれを　みすてゝかへる春の川かせ

題しらす　伊勢

春霞たちてくもちにかへるさは　かりのつはさもみえすそありける

弘長元年百首歌たてまつりける時春雪

安嘉門前内大臣

山あらしさそふもしらす春の雪　やまのはしらむ春の曙

題しらす　よみ人しらす

うちわたすあさの日かけのなき空は　のこるともなき雪そかすめる

宝治二年後嵯峨院に百首歌たてまつりける時朝霞

鷹司院按察

松さへ雪のみとりにかへるなりやよひもまた(?)春とこそ見ゆ

弘安元年百首奉めされける次に

亀山院御製

むめかゝを木の下ふかくたつぬれは花よりさきに袖のかほりて

宝治二年百首奉めされけるにかすみのうちに[illegible]

宗う

後嵯峨院御製

春の[illegible]と[illegible]めもかれ[illegible]さそふ[illegible]

嘉元二年後宇多院に百首奉ける時

後照念院関白太政大臣

白妙の袖のうへに[illegible]花の香をふくみ[illegible]ひくす

題しらす

山邊赤人

春の野になくや鶯なつけんと我家のそのに梅の花さく

雪の梅の木にかゝりて残りあるを

源信明朝臣

かつ雪はけさにきえつゝ梅の花付たる[illegible]のうへに春の[illegible]

貞和二年光厳院に百首奉りける時

太政大臣

ありし[illegible]の木と雪の[illegible]の[illegible]にそれとも[illegible]

若菜をよみ侍りける

前大納言為家

いさけふはかすみてあつき雪のあとの[illegible]に[illegible]摘てん

大中臣能宣朝臣

かすかのゝ若菜はいまはしめのうちにみつゝすゝきそ[illegible]つむ

文保三年後宇多院に百首歌たてまつりける時

民部卿為藤

ゆふくれの雲ゐはるかに郭公吉野の山路を越ますらむかし

百首歌たてまつりし時若葉

前関白

きてみれは春にかはらぬ山のはのひとりそけさいなく郭公

松のしたはの色かはりゆく

御製

常にはまつ聞つるとしもなかりけり郭公やなかぬ雲井の渡

弘長百首歌たてまつりける時

前大納言為氏

猶又や待かひもなき郭公まちいてゝかへる名のみたつらん

文保三年百首歌たてまつりける時

前大納言為定

五月きぬゆふへをかけて郭公声まよふ袖みたれてかたる橋

影もなし

中務卿宗尊親王

霜雲のり月をまつくのこゑみ郭公のまさる津もまそ思ふ時

弘長百首歌たてまつりける時

常盤井入道前太政大臣

夏の夜や郭公待ちもせて声も声もなくひかるつきかな

家百首歌合に小夜郭公

後京極摂政前太政大臣

君きぬれ野邊のあさみどりに年に春まてや色見え

建保三年内裏名所百首歌奉りける時　前中納言定家

そなたかと雲井にたなびくかすみのうへにかつらきの一峯

題しらず　清原深養父

春かすみたなびきわたるおりにこそひさかたのやまの花も見えけれ

百首歌よませ給ひける時山霞を　権中納言為重

さらぬだにかすみの衣たちかけて春のゆく人あまたはなくて

題しらず　読人不知

足引の山のかすみをわけきてもなほかすみぬる山の峯かな

百首歌めしける時浦霞の心を　御製

春来ぬとかすみの衣たちかへりかすみそめてのどかなる

貞和二年百首歌奉りける時　等持院贈左大臣

なにはがた入江のかすみのどかなるあしのやの空

題しらず　正三位知家

春の夜はおぼろ月夜のかすみそめてなにもおぼろにかすむ空かな

弘長百首歌奉りける時　常盤井入道前太政大臣

いつしかと春来にけらしなにはがたかすみにむせぶ浦のあけぼの

和元二年奉りし百首歌に梅

前大納言為世

本とこゝはにも夜もこえてむめか枝にむかしもさかりさ春風

己心院前攝政左大臣

流れくるもむかしのひとをしのはせよかさねまたる風そよ

梅か薫も残るまゝ世紛ふ春哉

伏見院御製

本のまよわら清ろ春の遠すゝ袖に飛ちる梅の下風

春にあかなくてみ侍らまし小

藤原為冬朝臣

本とこゝはさそひし頃にむめかおりつる袖まて春風そ吹

延文二年百首哥めされし時梅を

後光嚴院御製

にほひ来る風の使は梅の花さりとさそへる世にはとかし

梅あるところにて

康資王母

むめの花ひもとく春の風になをそふ袖の袖にうつれ

人々にすゝめ侍りし百首哥中

殷富門院大輔

おる袖に梅をまて色もあるそのゝかはるとも見ん

題しらす

よみ人しらす

くれなゐにそめし梅の花の色はさかりもなをそめるかな

延文百首奉りし時

権大納言為遠

冬こもり三たひ手なれし年のうちに梅のにほひそかすそへにける

弘長元年たてまつりし百首歌の中に梅

前大納言為家

梅花冬はかりそめなれと風をはさそふ人あらし

同し題

式子内親王

神のうへまつり給のむかしをと津ねて枝にさかりのはなも咲

天平二年正月梅花の宴し侍るとてよみ侍ける

大納言旅人

我やとにむめの花ちるひさかたの雲より雪のなかるとそみる

題しらす

曾禰好忠

春雨のふりしと思はてをりて世にかはらぬ青柳の糸

百首歌たてまつりし時柳

前関白 実

立かはる春にはもとの柳色あらためてなひく春風そ吹

延文百首歌めされける次に柳といふ事をよませ給ける

後光厳院御製

暁風のさそふしたてひとかたにみたれてなひく柳の糸

文保二年百首歌奉りけるに

前大納言為定

あすか風吹にかけしぬたきやめ柳のいとはまたなひく哉

柳をよめる

寶篋院贈左大臣

しつかなるやまのかみ風のあとなりけり緑のいと春風そ吹

おほん哥　前大納言為氏
あさみとり霞の衣ほしそめて風にみたるゝ青柳の糸
延文百首哥よ　等持院贈左大臣
みたれて霞のまよひに青柳のまれにはよりて糸そふく
百首哥たてまつりし時春哥　左大臣
青柳のかつらやいとのみたれしはさほやまかせの玉こつ
百首哥の中に　源家長朝臣
春風に野沢のあはにまさる緑ともに出る若草の姫り
建保百首哥たてまつりける時　正三位知家

なにはめすとこそ芦原の里には春霞たつ
題しらす　光厳院御製
流れこし春のみやゐのやまかけはなかきてすなかり
文保百首哥たてまつりける時　民部卿為藤
帰る雁をみしつれや井もちてはしはかなる旅
帰雁を　法印定為
おとにてもなかりし白雲に花のさく旅の
百首哥奉りし時おほん哥　権大納言為遠
春ふてかへるなれかる古里の花の色も見ゆらん
文保百首哥たてまつりける時

前参議為実

あさ緑やよひの空のうすかすみかゝるもいかにはるの夜の月哉

春歌とて　　藤原隆祐朝臣

時わかぬ竹の川辺のみとりにもはるはへたてぬ色そみえける森

土御門院御製

ふく風のおとにも春はしられけりかすみをわたるこゑのうくひす哉

中務卿具平親王

時しもあれ霞のうちに立かへりやまもとかすむ夕ふしのさと

嘉元百首歌に　　従三位為信

かすむ夜の月のかけにしらるれとまたはなちらぬはるのやまさと

暁鴬

嘉元百首歌に　　建礼門院右京大夫

花をまつこゝろはしらてほのかにも春の夜ふかくなく鴬

遠ちかくきなくうくひすのこゑにしもおもひあまれる春のあけほの　前大納言俊光

かたはしにのこる鴬の初音をもまつやいつしか春のはしめに　　贈従三位為子

弘長元年七月七日十首歌合に　　中務卿宗尊親王

たのめこし人の玉つさいまはとてかすみにこもる春のゆふく哉

延文百首歌に　　宝篋院贈左大臣

花

さくら色の花の林の山かせにちりかふみえてかゝる白雲

霞間花といふ事をよませ給ひける

伏見院御製

さくら花にほふや遠きみわたせはかすみのうちにいろそみえける

題しらす

御製

櫻花かはりやちらんみよしのゝ山も霞て春そのこれる

正中百首歌めされけるついてに

後醍醐院御製

みよしのゝ奥のやまもりこととはむいまいくかありて花はさきなん

春歌中に

藤原光俊朝臣

けふもまたはるかにみえし峯の雪やまさくらの雲になりけん

延文百首歌奉りけるに

中園入道前太政大臣

あさ嵐のとやまの花はさかりなりけり雲ならはこそ花もみえぬれ

新後拾遺和歌集巻第二

春歌下

題しらず　　　源俊頼朝臣

さくら花咲ぬる時はみよし野の山のかひより浪そこえける

藤原清輔朝臣

よしの川花のさかりやみなそこにうつりておつる滝の白波

道命法師

吉野山花のちるらん日よりてや山さくらもうつろひぬらん

光明峯寺入道前摂政左大臣

あしひきの山さくら戸をあけなからはなのかせのをとすなる

源道済

雲井まてたなひく花のちりまかふみよしの山のさくら

とはれてのかへるさひとしちれはなにをあらいなみとそ

見るをちりかけてなかれてのちのさくらなりけり

事に

いつまてかほとゝきすなかぬさくら花ちりかゝる夜の

春の百首哥たてまつりける時

和泉式部

ちるとみてあるへきものを花さかりいやまさりゆく

前大納言為世

かなしさやいくたひ山さくらちるまてなかめけん

花の下にて

一品法親王寛尊

こゝろのちりぬるよりもさくらはなゆきかひちるはちる

津守国冬

ちりくるはやまかせのおとにちるさくら

花の歌中に　　従二位家隆

志ら雲にいまそ絶なんしられけり花はさくらやたかさこの山

題しらす　　登蓮法師

咲やらぬ花にそふ山のしるへはいつかたもとまらぬさくら遠

従二位業子

かすみつゝ残しは浅き花な色よりも世の春をしりて

文保三年にたてまつりける百首歌に　　前大納言為定

春来ても志らぬ古里はみよしのゝ都そ見えぬ名のみの春

延文百首歌に花　　権大納言為遠

いまそ大咲さかりなる色みえて花のさかりに志らぬ花

題しらす　　白河院御製

志ら雲のかゝるところや桜花尋ねてみれはかはらさりける

寂蓮法師

白雲のかゝるみねの山風に花も散りなし春の夜の空

建長六年三首歌合に　　土御門入道内大臣

やまたかみおろす風のさくら花みよしのゝ里にちらぬ世

松間花をよめる　　権中納言為重

まつ川の深き緑の中にこそ花の色香もしるき春の都

文保百首歌奉りける時

後三條入道前太政大臣

絶えぬるをしのひさへしたに色かはるめいとみねの木の雲

題しらす　　一品法親王法守

日をへてそなかれたつ春やまかせのたかねのさくらやちりぬらむ

百首哥たてまつりし時見花

左大臣

かつきえてかすみにうつる花の色をさそふかせこそやまさくらかな

弘安元年亀山院に百首哥奉りけるとき

後西園寺入道前太政大臣

[illegible]

春の哥の中に　　前大納言為家

見わたせはいまやさくらの花さかり雲にかさなるみよしのゝ山

百首哥めされし次に　　順徳院御製

花の色は[illegible]

建保内裏百番の哥合に　　八條院高倉

[illegible]

百首哥たてまつりし時尋花　　前右大臣

時のまに[illegible]

題しらす　　よみ人しらす

春風もいりてかくれ我庭とはなをさそふはるの

花のこゝろなりけり

源邦長朝臣

人はそこともわかぬ梢よりかすみに月も花となかめて

題しらす

惟明親王

芳野山あらしや花をさそふらん木もとにかほる雲の朧月

月前落葉を

大納言経信

てるの月ありとやなかめまちつるに落葉かけはもみちりけり

暁庭落花といふことを

伏見院御製

木もとの苔は花にうつもれて庭のおもに残る影の明かたの陰

文保二年百首奉りける時

前大納言為定

春ことにわかたちなれしみちのへの木々のみとりもなほさそふらん

春の歌の中に

藤原遠江

花の色を風にまかする春の庭の雪かと見ゆる花のちり

波羅大弐頭季

ゆくはるの雪に漂て梢を思ふ心の花のちりぬる

花のちりかゝるをかんなくも見え

俊恵法師

ゆくりなくておもひしちるも花ならぬうつりまくらの

和歌所にて釈阿に九十賀たまはせける時の屏風に

後鳥羽院宮内卿

のとかなる春とおもはゝ思ひしれ数とさかりとみゆる花哉

題しらず

藤原家隆朝臣

くもとみそめにすゑけれ花のみやまかくれ松に

法性寺入道前関白太政大臣

花さそふ風をもまちぬ山さくらいそくものゝつねにちるらむ

延文百首歌たてまつりける時

太政大臣

みよしのゝ花ちりかゝる山風やおりてもきえぬ春の曙

百首歌奉りし時

従三位仲子

桜ちる花はさそふもあさせてそまたせてもみなみなはなのみ

春御歌中に

後鳥羽院御製

雲井なる花のかけにてちりまかふをとめの袖の花の雪

百首歌たてまつりし時

前関白　良基

かせふかは雲のゐるさくらちりまかふはなの程も雪とみえて

惜花といふ心を

常盤井入道前太政大臣

ちりまかふ花のにほひて山かせのみあらましかはなの志るへ

題しらず

津守国夏

ゆく春のわかれをしたふ心とやかすみの空にたちとまるらん

百首歌奉りし時落花

入道二品親王尊道

桜はなちりぬる庭はゆきたにもありてふるとも年をへぬ春の嵐

延文二年百首歌めされし次によませ給ける

後光厳院御製

庭はたゝねたにあらしそふかてさくやちるらん花のとこにて

権大納言時光

色ならて雪とやみえんちらぬまもちるかたにしそ桜咲けり

題しらす

鷹司院帥

むらくもの跡ふくかせにむらむらと立まよふとや花のちるらん

延喜十三年亭子院の歌合の歌

凡河内躬恒

うつろはむほとをもまたす桜花ちりもせはまし数とみまくも

百首歌奉りし時

関白前左大臣

さそひゆく風も心やつくすらんのこりすくなき花の白雪

題しらす

為兼朝臣

春風のたえまたえまに花ちりて木の間の雪とつもるらん

百首歌奉りし時落花を

権大納言忠光

山桜ちりてはいつこゆくへたになき嶺の白雲

御製

山人のをる袖にほふ色もなしきのふもけふも花の白雲

前関白 家実

木のもとにふしてみてこそはなれけれ色にやちりぬ花の白雲

花の香にうつるまてとそみ待斗哉

宝篋院贈左大臣

松風のなかはにかへてをきのはにをとろく秋の月

霞間月とよませ給ひける

後光厳院御製

木のまよりもるともいはぬ光にもかすむはおほろ月影

百首歌奉りし時春月

大政大臣

ゆきてたにうすくみえつる春の夜の月はかすみてくるゝまそなき

河上春月といふ事を

権中納言為重

なかれゆく川への月のかけそひて水にもはるの色やみゆらむ

文保二年百首歌めされけるに

[illegible]院前関白内大臣

てりもせすくもりもはてぬ月かけのかすみのはてに春やへぬらん

題しらす

崇光院御製

なかめやる山のはしらむ春の夜のかすめる空にのこる月影

建保三年内裏百首歌奉りける時

前中納言定家

いつかよりそやはしらむよのさかつきのかけはてそ

百首歌よませ給ひけるに

順徳院御製

みとりなるそらひの山の月の色にひとりのみやはかへる月かけ

百首歌よませ給ひける時当代

儀同三司

きのふまて色すこしみえてかはらぬ人のあせをすくるもまれなりけり

題しらす

小野小町

あともなきみちしるへかなはかなさやなきさのけふりもれぬやまのしらぬそ

圓光院入道前関白太政大臣

數ならぬ身をうらみしのふらむみをしるからにしるかけの見えて

為忠朝臣家にて百首歌よませ侍りける時御題を

皇太后宮大夫俊成

たひねするまちのねやのうちにおもひつゝやまかつきの泉

正元百首歌めしけるついてに

後宇多院御製

ちりそめしみをよしのやま吉野のはなの色にさかりは

弘安百首歌奉りける時

前右兵衛督為教

ひとめなき津の國のすみの江のうらにさしけて萩はら

小野宮太政大臣の家にて藤花をみ侍りけるに

清原元輔

霞のまかきもさくらの花もつらぬきかさねあらむ

天徳四年内裏歌合によめる

平兼盛

わりとえ色みけりすみ年のかりをそはかなり花

百首歌奉りし時霞を

左大臣

まかえよかすみやとゝろくのかきつかれは花のさかりかな

延文百首歌奉りけるに霞

太政大臣

春かすみの色はしるらんとかやつゝかうすの花のさかり

なみたかく霞のうちにみつるなかきはるの日

紀貫之

みなそこにさくらの霞とりわけなかるゝかけの花そちりける

延文二年百首歌たてまつりけるに

千種入道前太政大臣

いつしかと春のけしきをおもふやまみなとの色にかすみ波

百首歌奉りしとき

従一位宣子

あさみとりすみれつむのゝ霞にも春の色のみえてくれなゐ

九條前内大臣家三十首歌の中に江上暮春を

前中納言定家

惜しめどもとまらぬ春の名残をや…………ぞ見る

嘉元百首歌奉りける時 暮春

民部卿為藤

いたづらにくれぬる春は日数さへおしむこころのみぞかはりける

題しらず

皇太后宮大夫俊成女

惜しめどもかひなき春の……さてもくれぬる春の

土御門内大臣

いかばかりなごりのをしき春なれば……

弘長元年百首歌奉りける時 三月尽

常盤井入道前太政大臣

月日こそ春とて暮れぬ……ゆくらむ

おなじ心を

躬恒

流れ来て……花の見えし河そこにうつれる春の……

紀……

新後拾遺和歌集巻第三

夏歌

正治二年百首歌たてまつりし時

前中納言定家

ぬきかへてかたみとまらぬなつ衣さてもうつりし花の香そする

千五百番歌合に

嘉陽門院越前

夏衣いそきたちぬる今日よりはわかれしかすみ花のおもかけ

百首歌たてまつりし時更衣

深守法親王

けふといへはやかて夏衣ぬきかへていつまて花のかたみなりけん

遅桜の心をよみ侍ける

西園寺前内大臣女

なかなかに春のなこりを見るからにおそくさくらそさくら哉

元弘三年立后屏風に新樹を

前大納言為定

あをはなる梢はかりをしるしにて花のこすゑとみしやまそこれ

百首歌よみ侍ける中に

贈従三位為子

袖にこそわかれし春の花の色はなほかよひけれにほひけり

水郷卯花といふ事を

法印浄弁

神祇のみちなからむ月影もうつらぬ人のたのみやすみよしの神

弘長元年百首哥たてまつりける時

常盤井入道前太政大臣

ぬのさらす浪乃しらゆふかけまくもめくみもしるくさける神祇

中務卿宗尊親王家乃百首哥に

前右兵衛督教定

神まつる冬はしめのよるのやそうち人のかさしさす

藤原為道朝臣めしつかひ賀茂のまつりの使はしめて侍りけるよりよみつかはし侍る

よみ人しらす

君か世はかきりもあらしひさかきのかみのめくみそひさしかるへき

かへし

藤原為道朝臣

君か代のかけをたのみにかけて神のめくみをはまつ

塩の浦に百首哥よみける時春を

前中納言匡房

おほそらのかすみにかけて神やまのみねのあさひや白木綿の

夏乃御哥の中に

花山院御製

夏はなくてをふるしのみたらしのうらにたちぬるすゝしみゆるに

法印長舜すゝめ侍ける八幡法楽哥に

侍従為親

清き風さやかにわたる八幡山まつのこゝろはさそすみなけれ

文保二年百首歌たてまつりける時

前中納言為任

まきさえるみやまの嵐ふきしほりいかにさえゆく人のまつ[illegible]

題しらず

忠岑

郭公はつ声きゝてあちきなくたそやへたつるみちもしるらん

瑞子内親王

そのかみはとふ人もなしあさちふの月のまへにかほるたちはな

後二条院御製

明かたのねさめもおなし時鳥まつにかひある暁月のかけ

正治二年百首歌たてまつりける時

後京極摂政太政大臣

いまこむとたのめやせし郭公まちのもりの紀の下のむらさめ

人々に百首歌めされし次に

御製

待兼て明るとつけし郭公なくやさ月のしのゝめの空

郭公ことゝふらなき

前大納言為氏

津の国のいくたの森の郭公なかましものをちかたのきみ

左大臣家にて人々三首歌よみ侍し時郭公の歌

源義将朝臣

やましたのこゑほのかなる郭公なくやともなくてすきせん

嘉元百首歌たてまつりける時郭公

前大納言経継

紛れなくいまそきけふ郭公声のふかきひのこゝろなりけり

弘安元年百首歌奉りし時

衣笠前内大臣

思ひ侘ひねられぬまて郭公鳴出るまての寝屋もあかさん

延文百首歌奉りし時

宝篋院贈左大臣

聞わひてこそはせ郭公たゝ一声をたのむころかな

郭公を

中宮大夫公宗母

わきてなほ川我よかけて郭公なかぬ日はなき人のさとゝゝ聞まてあらむ

延文百首歌奉りし

前内大臣

郭公待てよのきゝてゆくてよはかならぬ行衛をつくしかれ

題しらす

前大僧正慈鎮

ちゝに我かはりてはすむとも郭公声のそれかの一聲もなし

名所百首歌奉りしに

正三位知家

かくれなやいまや宮古へいつゝほとゝきす声のそれ杜のあふかの杉

嘉元百首御歌の中に

後宇多院御製

古里はけふ待ゝつらむ郭公なかなか春の名残すてゝや

題しらす

西行法師

郭公わかひをわかぬひとてしあきらてはつねいつくをかたらん

暁郭公を　平氏村

ほとゝきすそれかとおもふありあけの空の名残はいつも有明の

里郭公といふ事を　権中納言為重

山ほとゝきすなかぬやまやはまつらんこたへぬを里になかなん

やまさとゝて郭公をまつらく

後光明峯寺前摂政左大臣

おの里もなれぬ待まにかくはたゝはつねもしもおのかいまともきけ

題しらす　寂人

ふるさとにおもはぬ袖をかはしつゝなかぬ夜ことのあはれのけき

郭公入道前内大臣

あかせやこよひなかぬいりひさしはやまもまちわひぬらん郭公を

貞和百首哥奉りし時　前中納言為秀

なつくらにつきぬ郭公なくをまつ夜の袖かはつれ

百首哥奉りし時　従一位宣子

時しもあれ郭公なくのさとゝへまつやかつなれ

このこゑの郭公ねやにのこる事をまつらん

題しらす　左大臣

いくこゑとかたらへくる郭公のこゑをなかぬ夜のおもひに

家にて人々三首歌よみ侍しに菖蒲を

あやめ草ふかき沼江の根はけふそ引残しみきはにのこる時そ待らん

五月五日くまなく晴たるにいすとて

枇杷皇太后宮

なき世のあとにひかぬあやめ草袂にかゝるねのみそ見えける
ぬし

法成寺入道前摂政太政大臣

とりかへてみけるあやめの袂をみてそれかとおもふ我そかなしき

百首歌奉りし時菖蒲

前関白 太閤

あやめ草ふかき沼江のなかにそのまゝにかくるゝ浅香のあやめ

前関白 兼経

ひきむすふあやめの草のまくらにはいとゝやいねむ一夜はかりを

夏乃歌の中に

中宮大夫公宗

なかき根はひくにまかせてなきさに残るあやめ草かな

一品法親王寛尊

かけねはおなし袂にあやめ草ひくともしらぬ人もありけり

百首歌めされし次に五月雨

後光厳院御製

さみたれはあやめの草のゆかりにて浅香の沼の水まさるらし

夏のうたとて

前中納言匡房

五月雨はやまかけさへにあやめ草のねの程しるくなりにける

題しらず　寂蓮法師

さやまきゝにみ霞にかゝる天川のせゝやまさる文月の空

百首歌よみ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

かさゝきのわたすやいつこ夕霜の雲ゐにしろき峰のかけはし

題しらず　民部卿為藤

をとめ子か井の清水みなあてわたす所をとあさへ舟

進子内親王

松たかきをとこ山てさしてかけし月のかけの下にけ

文保百首歌奉りける時　前大納言為定

さなへ為おかしかりし雲のかさゝきのかけたさとん

百首歌奉りし時橋　前関白 小字

白ふ(ひ)ろえふさかへ為わたす所はなむかしそおとなかすらん

右大将に侍りける時家にて千首歌よませ侍りけるに

よし時磐橋を　左大臣

なかあみちは此わたしつくるかつらきの神のまことの心よりあまりてかけし

夜の歌の中に　中納言家持

我やとのそれても花のうへにおきそめし霜のふけゆく夜はさむからし

前関白 小字

明ほとやこのひとこゑも郭公なのらぬ五月のかきさきにありせは

藤原清正

夏の夜乃月まつほとに郭公我やとゝへりそなかなり

山階入道左大臣

とりかへりなにのこりをか郭公ならしのをかにたちかへるらん

百首歌奉りし時郭公通を

まつ夜はやちかきかたやに郭公あけのそらにはなれやかへらん

藤原為家朝臣

後鳥羽院御製

さみたれの夜のまきさかる郭公かたらひてゆく声ハかきりなりつゝ

寛元百首歌たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成女

五月雨はれぬやむまそみえぬまの日数も猶雲かゝるみねのまつ山

百首歌奉りし時五月雨を

権中納言為重

しられぬそいつる有明のかけならて雲のなかなる五月雨のころ

津守国量

いかなるやちるさみたれの比なれや水もほそ江のみさかえぬらん

建保百首歌奉りける時

順徳院兵衛内侍

ゆふされはとるさなへのいつかたも露やこほるゝ

順徳院御製

雲もなかりしいくあきのよにかはらん秋の月影

文保三年百首歌たてまつりける時

後西園寺入道前太政大臣

見し世にはかはりぬる身のうさへわすれかねつゝ雲のうへの月

題しらす

従二位家隆

庭の面はまさこもしろくてみもいくあきて秋の夜の月かけのさやけさのころ

延文百首歌奉りけるに

寶篋院贈左大臣

秋の夜のみなせ川ゐせきは波をこすかはらのあさ瀬やとる影

百首歌奉りし時秋月を

関白前左大臣

あまの川瀬をさえゆく御溝にかゝりてしらさらん哉

松の花の絵をこそませ給ひけるに

御製

みし秋や昔にかはる秋の月かけはそれとみえぬ露のあはれさ

百首歌奉りし時秋月を

前右大臣

庭さらくなりてしたふ秋の月かけまつらに河なるゝ山川の水

題しらす

頓阿法師

秋の色も山はさえたる影にすやそらにかけのさえみる哉

嘉元百首歌奉りけるに

前中納言為相

みなと河しらみやくれて志かまそかこつゆみえかぬる

夜舟の中に　　津守国道

いとゞ猶いへぢを遠くなりぬらんみなとをさしてさしこぬる舟

前大僧正慈勝人々によませ侍りし千首歌の中に

前大納言為定

さえわたるねはあらそふ島の志ほみちて島やあらそふくもりなく月かけたるらん

延久（文元）二年百首歌奉りしときに旅月

太政大臣

志らぬ野をわけてもまかすあまた夜を月のしるべにさそはれぬらん

松下旅　　津守国夏

草の原またぬるやさ夜このまやすらひてやすらへ河みえわたるのみ

嘉元百首歌奉りしときに　　従三位行能

なかなかにたかやの庭も夕かげにすゝしくそゆく河ちかき庭ところ夏勝

題しらず　　左兵衛督基氏

忘れてはまことそ思ふ夕立の雄すゝしき夜の秋の月

百首歌奉りし時夏月　　権大納言為遠

影てらす夜半の氷と見ゆるかなひかりにさむきあさぢふの月

おなし心を　　前大僧正隆弁

みなせ河なみてゆく夏の影に月やこよひの光とめつらん

従二位慶子

鵜かひ舟山のかけなる河波にうつるかゝりの月の光に

照射をよめる

夏の夜はともしの鹿のめをあはせてあはれとも思はぬ志かなりけり

和泉式部

五月やみともすかゝりのさしくしにみえてそ志かのありかなりける

権中納言為重

文保三年百首歌奉りけるに

大井河はやせにくたす鵜かひ舟いくせの波にかゝり火のかけ

前大納言為世

二品法親王家五十首歌に鵜河のこゝろをよみ侍りける

うらひとのかゝりさしゆく鵜かひ舟せゝのいはなみかけてゆく

惟宗光吉朝臣

延文二年百首歌奉りける時

鵜かひ舟さすや河せの波よりもおのれさきたつ山の端の影

権大納言時光

前百首歌奉りける時

夏草は志けりにけりなかきほとにたえて訪ふ人の跡もなき

前参議忠定

従二位家隆

夏草みしかき野辺のまくすはらあきまつ程のやとゝなるらむ

正治百首歌の中に

後京極摂政前太政大臣

わかやとの庭のさゆりの花の色のなかにもしるき夏の夕暮

延文百首奉りけるに
太政大臣
はかなくそおきゐる露の草葉をもおもひあかしてかへる露哉
正治百首哥奉り
式子内親王
ぬれてたにかはくまもなき夏衣ほしもあへぬにぬるゝ袖哉
百首哥奉りし時
按察使資康
むさしのやはなのみたれにおく露のひかりそまさるあきのよの月
文保百首哥奉り
後鳥羽院御製
風さえてよするなみまの氷かもしらぬ夜のまにこほるみなとか
題しらす
前大納言實教
世をかこふ萩のしたはの露けさはすゝしくもあるか秋風そ吹
貞和百首哥めしけるついでに
光嚴院御製
ゆふされはのきはのをきにおとたてゝそらにくもれるあさ白露
寶治百首哥奉りける時夕立
後深草院弁内侍
よのつねのあきのそらやはくもゐなるのちにゆふたちのはな
祝部成茂
みよしのゝやまのはしろくあけそめてしらくもかゝるやまのはの花

夏歌中に　　前参議雅清

ひとむらはやまもとかけて小野のなかに夕立の雲のかゝるすそ野

儒正兵守

夕立の露もむら雲晴ちりて虫の跡そゝく軒の松風

延文二年百首歌たてまつりけるに

前大納言為定

なるかみのをとはかゝるゝ雲の上に流るゝ雨も松ふく風の宿

前大納言公蔭

いかにせはひとりの山もふかゝりきやゝ夜ふかき荻の風

嘉元百首歌たてまつりける時

前大納言為世

夕されはいつくともなく雨過て日かけすゝしき秋の初風

後宇多院御製

すゝしさは外山の木陰たちよりて月もまたぬに宿るしら浪

題しらす　　よみ人しらす

ひとえにも雨そゝく松ふく風のたえまにすゝしきむらさめの空

前大納言為兼

蝉を

ひくらしの声にきこえてゆふくれの木の下かけに鳴蝉の聲

前大納言俊光女

夕くれはゆふまやさしに鳴蝉の声にすゝしき木の下露

文保百首歌たてまつりける時

後山本前左大臣

まけしとや山のたかねの松かせにおとをかさねて蝉そなくなる

名所百首歌奉りける時

前中納言定家

蝉のこゑ秋あるにほふ松かせにまつひとつの思ひもそなれとおもひきや

延文二年百首歌たてまつりける時納涼

太政大臣

涼しさはいつもときはの杜陰のしたはならすや秋をおほえむ

松下納涼

源頼之朝臣

吉田のなつのゆふくれや松かせにさそはれてこそ納涼しるらむ

前中納言雅孝

おもふことなくてそみるの松かせをみなそこにもあきかせそふく

後醍醐院御製

すゝしくもなりてやくまし(ま)みさひゐの清水の里をぬきとも

和歌所にて六首歌奉りける時

後京極摂政前太政大臣

松かけのいはゐの水のゆふなみにはやくも秋のけしきをそみる

題しらす

好忠

ありそ海のなみにしすゝしきにあれはやいつみのそてにもとむ泉

貞和二年百首歌奉りける

等持院贈左大臣

なつふかき清水涼しきあきのひとつに秋のけしきそ

百首歌奉りし時六月祓

権大納言為遠

みな月やたかねにのこる志らゆきのきえかてにする夏のしらかな

入道二品親王尊道

見たらしやひくてもたゆくあはれなりせみのなく音をすゝしみなせる

夏哥の中に　　前大納言資名

みたらし川岸のかけくさひとつたにかせなきかけに風そたちける

延文百首哥奉りける時　夜秋

こゝろあてにかはさきゆくあみのあさひにかゝやくさとのつゆさ

入道二品親王尊道

左京大夫顕輔

かは波の瀬々のいはねにかゝるたまのゆきとみるまてなつのよるかな

夏をまつ人かな

新後拾遺和歌集巻第四

秋歌上

百首歌奉りし時はしめの秋の心を

太政大臣

[illegible]荻のおとたに[illegible]秋の初風

貞和二年百首歌奉りける時

等持院贈左大臣

[illegible]あさけの風の[illegible]秋やきぬらん

文保三年百首歌奉りける時

前中納言為相

[illegible]秋の初風

百首歌奉りし時

前関白[illegible]

涼しさはまさるはかりを[illegible]秋やきぬらん

題しらす

西園寺左大臣

今日よりは秋のはしめときゝて[illegible]袖そいとゝ露けかりけれ

貞治百首歌奉りける時

皇太后宮大夫俊成女

[illegible]袖に[illegible]

[illegible]元百首歌奉りけるに七夕

贈従三位為子

[illegible]

松の一葉残らす手向行ぬ計哉

花園院御製

かさゝきのわたせる橋に七夕のあふせ[illegible]とおもふてまたしらまし

百首歌めされしついてに

御製

ほしあひてけふあへる空のあまの河せをいくたひかみちてなかるゝ

弘安元年百首歌奉りける時

入道二品親王性助

きのふまたあけぬよのまのやらむ七夕の年にまれなるわかれしぬらん

七夕の契りいふもなき残

入道一品親王法守

七夕のあふもうらみて一夜のちかひをたのむまてもなき

百首歌奉りし時

左大臣

秋の夜のあはれさのみやとはかはれはしる袖に秋風そふく

前関白 大閤

あはれなるほしあひのちのあはれをもとしにまれなるきさのみやなかめける

文保三年百首歌奉りけるに

後西園寺入道前太政大臣

とりつきてまちつる程に絶えてまたあはぬよのまにほしの上風

題しらす

祝部行氏

秋の夜のあまの河神代よりちきりてまてあまのかはせにあはぬせそなき

前中納言定資

さをしかの鳴音はるかにきこゆなり猶野への月のさやけき

従二位親子

こゝやさは野守もなつむ秋の野の花ちりかふ小萩か原のゆふくれ

嘉元百首歌奉りけるに

前参議忠定

こゝやきの露わけ行あさ衣うらかれそむる袖の萩か花ちる

題しらす

正三位通藤女

霧のまよりさやかにみゆる秋の野の萩か花すりにほふころかな

藤原[illegible]朝臣

まつ虫の鳴萩原の露のうへに月やとりけり

文保三年百首歌奉りける時

前大納言為定

咲てこそ秋野の中はうつりけれ古枝の萩の下のこゝろに

百首歌めされし時萩をよませ給ける

御製

秋の色やいさゝむら萩露そへて秋のもなかの花にさくらん

嘉元百首歌奉りける時

前大納言為世

野へとはゝ我もともにと萩か花ちらぬさかりの秋のなかめを

題しらす

山階入道左大臣

さ衣はつゆをとはかりぬれにけり萩のしたはのうつるけしきに

民部卿為藤よませ侍りける十首歌に

法印長舜

山桜とはるゝ人もみえぬまで花さきにけりとひくる人なき

野径薄を

源頼之朝臣

打なびく袖かとのみ見る秋風に野辺の尾花の人まねくらん

嘉元百首歌奉りけるに

民部卿為藤

花を折れとこそまれといひしそのあさけさもまたまつらん

題しらず

中務卿宗尊親王

いまよりはつゆも袖にやおきそへて入野の尾花秋風ぞふく

家の百首歌合に野分

後京極摂政前太政大臣

きのふまでよもぎにとぢし柴の戸も野分にはるゝをかのべの里

従二位家隆

かるかやのすゑふきまよふ秋の色みれば野分の跡のあさ風

刈萱をよみ侍りける

瞻西上人

さらぬだにみだれてなびく刈萱をなほふきみだる野分のかぜや

入道二品親王家五十首歌に野分

前中納言定家

すゞ川の尾花がすゑに吹風の色こそみえね荻の葉やそよぐ

弘安元年百首歌奉りける時

後西園寺入道前太政大臣

叢もさむしの神さひにゆきまて霧もたちかくすなもしらぬ神の宮

弘安元年百首歌よみ侍ける

前大納言為氏

あり秋のよもすからなかめてはさりともとおもひやなをよそにかも遍

貞和二年百首歌奉りける時

太政大臣

よそにさへおもふ心は秋をさそひてしも雨そみれはいはぬかけもあらん

人々に百首歌めしける次に暁の月を手習行ける

後嵯峨院御製

あか月のよくはゆかしみのかたもなきみすさめてもおもひわひぬる

延文二年奉りける百首歌に

寳篋院贈左大臣

みさをにはとなかきにしられぬそいかはよのこゝろをそへぬゆふ

百首歌奉りし時

従三位仲子

秋ならやましれぬ月かけのそこにひかりは風そ吹らんや

文保百首歌に

前大納言俊光

夜さむなるひとりねのあかつきの袖のかたしきに秋風そふく

建保二年内裏秋十五首歌合に秋露

参議雅経

打はらふ袖もさなから露しけきまたあはれなるゆふ暮の空

夜庵此ふ事を

住さとのあさ浦に志ら浪さそふ月よのゝあき風ぞ吹

百首歌めされし次に　従二位業子

いつもあかぬひとの住さとにたち松かぬさそふのゝ風

御製

と見人志ら浪

松風てかはらぬ色は松のきの書かやまとうらん

権大納言為遠(家)

家にて人〻三首歌よみ侍りけるに

祝部成光

住そめし松の風やさむからしたれにみのられ庵そ吹らん

百首歌奉りし時庵　左衛門督資教

物よりもあかれはてぬまことをたれかあらはむ荒やなきしん

嘉元百首歌に秋夕

前大納言為世

なかめ侘おなし心をうきことをかうそひしこゝろ秋の夕暮

百首歌奉りし時同心を

権中納言為重

ひとかたにわひしわひて庵のきれ花されもあの松の中なれし

建保百首歌奉りけるに

前中納言定家

たかためにひくらむ糸のよるの衣きてみるたにもむらさきの衣
秋の御百首の中に　崇光院御製
かりにきぬ秋の野原にむすふ玉のさなからきえぬ露の月かけ
題しらす　権律師覚家
霧こめし秋のよそらにいつことも[illegible]
百首哥奉りし時
なき人のかたみにみする玉章[illegible]
前関白　太閤
おなし心を
いくちさとはかりもしらぬ秋風に[illegible]
法印忠則
延文二年百首哥奉りけるに　鷹
普光園院贈左大臣
いたつらとならぬきにかり稲の葉のさむしろになかりの身
百首哥の中に　中務卿宗尊親王
あさとほむさしのはらの末の月のきこゆる山を秋風そふく
題しらす　衣笠前内大臣
さかしらに木をもさへやかれぬらんこの秋風の[illegible]
入道二品親王覚誉
さりともと契りし秋の霧のまに[illegible]
前の百首哥奉りける時
前中納言定家
かりねするとこよのかりの[illegible]

弘長元年百首哥奉りける時

常盤井入道前太政大臣

くもりなは出しさくさえ夜さへてめきたにはまはるあきの旅人

文保三年百首哥奉りけるに

後光明照院前関白左大臣

笛竹の夕霜氷の音にお(と)れたる雲かゝりくもるとそれ山のりと

よみ人不知

かはさりけれみをとも思ひはすみてたくおもふらん業毋

百首哥奉りし時霧

権中納言為重

空に(た)つ霧にさりけるをすゝみてあつさかはなみの殿

寶治百首哥奉りける時

皇太后宮大夫俊成女

これもまた世にありてなからぬ中におもひもなくさむる秋

貞和百首哥に

後岡屋前関白左大臣

かへりこむやまを思ひてもなかむれは山の端の月

百首哥奉りし時庭月

前右大臣

そ庵の霜を見る月のあまりのさはりも雲の色

野ゝ原

等持院贈左大臣

ほとゝきす松よりまたの木のまに出る山の月

延文二年百首哥奉りける時

権大納言為遠

見渡に浦はく秋志て稲の雲ゐにやらぬ霧晴
月清き中に

後鳥羽院御製

いさみゆさたかしの山の雲晴てひとり友なき月かけ
月前風わかみにともなふ月のまつかけ

伏見院御製

むら雲をさまる中をかりそめ月のみふかき葉に松風
あけほのゝ雲のはれまにてらす月

延文二年百首歌めされし時

後光厳院御製

桜さく志賀の山ちをこえゆけはふきちる花の雪の月

亀山殿にて人々さか月をすゝむ千首歌よみし時
里月暁月といふ

後宇多院御製

見渡せは物のはてまてわか月みつゝひきあくるおもひこめ

後京極摂政前太政大臣

雲ふかき霧のはれまの月影に秋の志るし

藤原盛清

山の月ひとりふる里秋の夜の

津守国冬

山たかみ秋のよの志らむまてみる山の月

正三位成国

雲の浪煙のなみとわけそめてはるかにわたる秋の夜の月

源経氏

さえわたる月のひかりに雲もなくそてにもうつる霜や置らむ

津守国夏

あまのはら月のやとりもなかりきこのひかりにみつる秋そや

文保百首奉りける時

前大納言為定

天の原ふけゆくからにしつかなる雲のかよひ路月そさやけき
月のことそらまさる秋の夜は

後二条院御製

ゆくすゑやとほきをてらす月かけはあはせてわかや比の雲の林

題しらす

待賢門院堀河

秋の夜のあけをしらぬもまちまちてかたふくかたのみぬ山のはに雲

法性寺入道前関白家百首歌に

皇太后宮大夫俊成

きよみかたかたさやけき月をみてもやせのやせ絶とやらん

建保内裏三首歌合に秋野月

皇太后宮大夫俊成女

わけいりてはかなき秋の野の草葉をみてさえわたる秋の月

題しらす

太宰権帥仲光

さそひ行風もむなしき秋の夜に月をよもすからかさる秋の庭

大蔵卿有家

猶ふかきみゆの野中の草むらに秋をかさねてや月をとゝむらん

弘安百首哥中　　前大納言為世

よもすからつゆのおきふすさよ衣みたるゝ月に袖結ふらん

建武元年九月十三夜内裏にて人々題をさくりて
哥よみ侍りけるに　秋色月

前大納言実教

秋もまたこよひかきりてもろともにわかれてかへる月のけれ

題しらす　　津守国道

みやまゐの葉かれゆく志まはたもしをみなみ野原

水上月を　よみ侍し

秋やうき身やうきともみてわかすかるそすめる世の
よの月

新後拾遺和歌集巻第五

秋歌下

秋の歌の中に　　順徳院御製

秋田のかりほのいほのとまやうすみし月にぬれさる袖かほさしわ

田家暁月といふ事を　仁和寺二品法親王守覚

あはれともひとりみつる月影をいはそかくこゝろしらるゝ

題しらす　　津守国助

霧はらふなかれを山のはの月もこよひそ晴そわたる

如願法師

やまたもるかせこそ稲葉にそめてかりねさひま月をみるかな

文保百首歌奉りける時　　前大納言為定

あれぬ日の秋やかはらぬ世の中の月のなかめのみは

今は二十日あまりさやかなれつゝそは

御製

このかはきにしきとれはさみとりのせてはすめる月かけ

題しらす　　よみ人しらす

月のすむひかりそれみかけやしいなれねなきを

暁月を　　津守経国

久方のあまてるさとの秋の志らまつもとにあかつきの月

題しらす　　法眼慶融

かすかみるみかさの山のみねの月かけのかはらぬなかそかなしき

為家朝臣

あくかれしのそまはいつまてさやけきといく秋月にかこたむ

寛元百首哥たてまつりける月

従三位為信

あくかれんのそてをおもひのさきもはれまちせて月をみるかな

なかめし哉

藤原仲實朝臣

わするまみことのほとのゆく色の月はまたいつとなくなかめん

月の哥の中に

前大納言為家

ゆふ色かし河辺をそのくけちには月はきえまちるらんちる桜

月前花をそこに(?)あはれもいはし花あはれなりける

百首哥めされしついてに海月

御製

冬かれのあさまをすくはつれなくもひとよのころ枯の葉の月

左兵衛督基氏

礒月を

しほならはおのこつけのきえまよふても月のかけそちかきまま

百首哥奉りし時湖月

左大臣

月はなほちゝにそ花なきさにやあまのつり舟

寶治百首哥奉りける時松間に心残

安嘉門院高倉

くもゐよりあはれの月か照らはこゝろにみよ

百首哥奉りし時　前関白

山のはゝわきてそいはゝ月かけのあかてうつるとをみゆなり

月のうたとて

ゆふみれはとよかとまやのあはれなり月にすみける志かの浦なみ

源頼春朝臣

あくれてとこなかにそ霧しも雨のふる秋まてつる月の旅

前中納言基成

西園寺入道前太政大臣家にて人々に十首歌よませ

侍りけるに擣月

菅原信言朝臣

たと識貫さぬかのなかし秋をわけて月にそわたる峰の旅人

菅原長秀

題しらす

あら山やこえてかへる月かけはやとりのさとのあかつき

百首歌奉りし時

従一位宣子

とゆ志井山の月は秋よりかなしきまさる花

月前落葉といふことをよませ侍りける

法印浣禅

題しらす

あけはのゝかはもやとりし花のこゝろをしらてなかむる秋は

仁和寺二品親王守覚

いつきのみやの秋の月に露しけきむしのなく夜をかなしむ

弘長元年百首歌奉りける時

信實朝臣

ねきてつる月もあれやとこはれつる秋のなかきはこゝろなりけり

嘉元百首歌奉りけるに秋のうた

正二位隆教

それならでハまた思ひもなくさめて秋のよの月をや見ん

山路月を　　伏見院御製

誰かまた月かけはなれぬ山路の枝折をは

題しらす　　大蔵卿有家

すゑの松行秋とけゆく雲まよりいつる山の端の月

延文二年百首歌たてまつりける時　　等持院贈左大臣

ともしける心と見ゆる月影の秋の夜ことにすみまさるらん

前大納言為教人々に三十首歌よませ侍りけるに松間月　　惟宗光之朝臣

山風にしくるゝ松の木間の月ハ雲まにいつるけふそみる

題しらす　　頓阿法師

憂ことを思ひもいれぬ人ならはひとりみてはなきにこよひの月をとゝめん

建永の比太神宮に奉らせ給ける百首御歌の中に　　後鳥羽院御製

思ふ事我身にあまりやそよ月影神まもるらん白露

月歌とてよめる　　正三位知家

なかめつゝとひしるしもみえぬ哉あまた月見ぬ

秋の歌の中に　　光俊朝臣

なかれてもなかめにあかぬ秋の夜の月

文保三年百首歌たてまつりける時　　権中納言公雄

おもひきや津のうへにそすみなれし雲ゐの月をよそにみんとは

題しらす　津守国冬

露こほる野への草は霜かれてあさちにすめる月影

民部卿資宣

まつかせの音はかりして月よりもおもひあかしの浦のなみ

暁月の心をよみ侍る　平貞秀

いつよりも今そかなしき暁の月にのこれる夜半の名残を

おなし心を　前大納言為世

西になるまてはあはれにまさりけるよの中にみゆる有明の月

為忠朝臣家百首歌に有明月　皇太后宮大夫俊成

秋の夜は山の端ちかくなるまての月みる程はたえてねられす

永和二年九月十三夜内裏にて十三首歌講せられ

けるに月前祝　従二位為敦

露はなほむすひもおかん月は秋の千代の草葉にやとしてやみん

題しらす　大江宗秀

秋ともなき心の空にすむ月のなかめもしらすくもる月影

太政大臣

よひのまにやとる野への露はれてたえまとまれる月の影かな

蘆をよめる　按察使資明

なにはかたみちくる汐やきりくもりよしあしわかぬ月の影かな

前大納言為氏人々にすゝめ侍りける住吉社十首に

式乾門院御匣

さりともとなくさめしひとまたれしも秋のおもひのかすはまさりて

嘉元百首歌奉りけるに

津守国冬

なか〳〵におもはれけりなふけゆけは夜さむのとこの松風の聲

題しらす

後京極摂政前太政大臣

たちかへる秋のゆふひの初霜にみえわたりあまのかれ袖そ交める

頓阿法師

里人はあさともかりこぬしほれ和田山の松や秋さむからん

堀川院に百首歌奉りける時

神祇伯顕仲

ゝ夜このさとひとはかたをあやしみぬらし秋の霜

入道二品親王家にて五十首歌よみ侍りけるに

前中納言定家

里人やあさむるおものさやかにて嵐吹たつ山かたかり

題しらす

前参議長継

何よ秋のそらもさむし枯葉のうけゆく袖にあまそゝくらん

三善為連

あくらて山あれやさむく衣うつをとそ有明はくもらん

前大僧正光海

枯はてぬ秋さむきさと成わたるやまおろしはよ衣うつらん

月前擣衣　　　鎌倉右大臣

夜よふけて雲ゐはさけゆく月影にいそくや人の衣うつらん

題しらす　　　普光園院攝政左大臣

ちひのまはしつりとして有明の月にかはすむ衣うつなり

九條前内大臣家百首哥合に

従二位行家

あきとのみたにいはれの川のゆくやかれ神の杜の梢もさひしき

題しらす　　　前中納言定家

宗乃れいせ无無残世のとあてゝそのれはるかに菊の花

小野宮む秋にはまちわひん人の庵の霜にもたえぬ月の

さやかなる月のゝかけあかつきそよる

霜とそ見ゆるやなみる長月のはてはあき世をしのふ見ゆ　　　貫之

題しらす　　　藤原基任

いつまてか菊の枯とききてしらんつてくる霜にしたてそきくのそふ

文保三年百首哥たてまつりける時

前大納言為定

まけとみれ霜の菊の花のうへにをきてかさぬる袖の志ら霜

前大納言為教

日をへつゝ移ろひそめし菊をてゆく枯葉のこそ庭の白菊

秋哥中に

権大納言公直母

志らきくの花も移ろふ秋の色や風息さそふ花れしらしまん

鹿嶋風といふことを

中務卿宗尊親王

あさまだき(?)の浦のはまべにかりの枕に秋風ぞ吹

題しらず

藤原行朝

初霜のおきてくやしきわかれぢにわれもろ枕秋風ぞ吹(?)

好忠

いとゞしく思ふ(?)月はなかりぬるをば嵐さめあらそてなほすず(?)

従二位家隆

あはれなる秋の夜深(?)やわがみ(?)のこゝろにあはぬ(?)あさき(?)

よみ人しらず

冬されば(?)嵐の風もいとゞ山さびしき(?)あさ(?)ひとつ(?)なり

山紅葉を

入道一品親王法守

さそはれて(?)ゆく(?)ありあけの(?)空にかの紅葉ぞ(?)

柿本人丸

露霜のおきてし(?)秋のみむろの山(?)色付にけり

儀子内親王

日なき(?)てらまつ(?)ありあけの(?)時雨そめし紅葉ば

前内大臣(?)

百(?)の(?)あ(?)りまつりし時(?)紅葉

題しらず

読人しらず

さかりの時(?)雨の(?)けり(?)秋の山(?)

加茂(?)山の(?)あきの神の(?)しぐれ(?)

立田姫のみちのいろすみそめにはたちてそめよ霜も時雨を

源和義朝臣

むらしくれかゝりしそてをしほりつゝわか身も今はちる紅葉かな

津守国夏

かつちるや時雨のあとのぬきかけてとりけて山のにしきみちなん

延文二年百首歌奉りけるに

太政大臣

高雄の紅葉ところのみさきやつの国のかけのおちに落らん

後光厳院に二十首歌奉りける時山紅葉

津守国冬

もみち葉もたなひくくもに高円山松風はぬさとちるらん

百首歌奉りし時瀧紅葉

儀同三司

此ころやまの人のかみちをそめてつくらぬ錦なき紅葉

源義将朝臣

とふ人もみちてもせになかるゝやとのをちはやなかれ来るらん

前大臣

たつたひめ紅葉にぬれてかへる山のたきつせ

題しらす

内大臣

わくらはにかみちれはいにしへのおもひそみちれ白雲

紅葉百首歌よみて

前大納言為定

かきりなき紅葉のぬさかけとめてかひなきやまにちるもみちそ

題しらず　伏見院御製

もみぢ葉もさそはれかさなる秋の夜にちりかゝるまで有明の月

宝治百首哥奉りける時　後深草院弁内侍

かつちるをはやまの風のふきとめてあすとさへなど秋のなごりか

新後拾遺和歌集巻第六

冬哥

初冬の心を　中務卿宗尊親王

時わかぬ波さへ色にこきちらし神無月あるゝ時雨やふるらむ

文保三年百首哥奉りける時　前大納言為定

あさぼらけ時雨しくれもあへず見えて月ひとつやは山のはのめぐる

貞和二年百首哥奉りける時　等持院贈左大臣

あらき風や峰の木葉をさそふらんやさと人冬きぬと知るらん

延文元年亀山殿にて十首哥講ぜられし次に初冬

時雨

山階入道前左大臣

神な月しはしもさこそ思ひて時雨せしもはれぬらしめくる(?)

百首歌奉りし時時雨

深守法親王(?)

かき曇りえ雨やとる秋の方をまくなくもれ日影哉(?)

松間時雨(?)

前大納言為世

風さゆるたかねひとむら雲きえて…時雨…(?)

源高秀

霧(?)はれしあまのとはなれ…志(?)…

藤原為重朝臣

山里のさびしさもやまぬ…(?)

前大僧正道意

ねさめてきくらといふもさも…つけてふる時雨つ(?)

嘉元百首歌奉りける時

津守国冬

山のはをしくれてすくるあま雲やさとをそめ…(?)

落葉し波(?)

法印慶運

今はとてねやのまきの木の葉まよひ日影もこそ時雨なりけり(?)

山時雨といふ事を

山本入道前太政大臣

山のはにかゝれる雲のたえまより…(?)

同百首歌奉りける時

前中納言定家
あはれ猶むら山の雲もむらしくれそめてそよりの紅葉哉
弘安元年百首歌奉りける時
前大納言為氏
あらし山峯の木枯ふかぬ日もちりてさそはぬ紅葉ちるらん大井川
瀬しらず
藤原泰宗
ゆふ霧もしくれのふる時雨さへのこさぬちりは木枯ぞちりけり
藤原行春
神無月いまや紅葉の散ぬらん庭成木もとにあつめてぞみる
寶蓮院摂政太政大臣家にて人々三十首歌よみ侍りける
源家經
落葉
嵐のふくみ山の庵には木の葉は紛ひても色ぞさかれり
松の一木残
前大僧正道朝
足引の山松風は吹て色は来めらし木の葉ちりまかふらん
前參議能清
わかの浦の松風さそふひきそ散の木のさえて木のもと紅葉
百首歌奉りし時
前関白
家
もみぢ葉は波にちりしく紅葉ちりまかふ木の葉かな
源重之母
題しらす
ともすれは木の葉ちりまかふ木の葉ちりしく庭の紅葉
嘉元百首歌奉りける時

昭慶門院一條

木すゑにはさえて色めく紅葉をも庭にちりしく雨の下かせ

百首歌奉りし時

権大納言忠光

松ら浦とら浦とくらら花をみわれあらや庭のまさらむ

貞和二年百首歌奉りし時

太政大臣

みなれつる松ちる庭に志水まてよるゝ渡しも木のもとゝ去の春

百首歌よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

さ川霧は浦にあまりかまるとりわきなさ東のそらかまゝく

堀河院に百首歌奉りけるに

俊頼朝臣

をみなれしわさのきえゆきて跡もあらしと雪まよふまて宿りけり

庭草のいとしげれる

祝部成光

人めさへかれにし宿の夏草のこゝろまかせにしける庭の夏草

文保三年百首歌奉りける時

前大納言為定

かきねのみあをくおえふかうりかも我たゝすまて霧やこそらん

夏の歌の中に

皇太后宮大夫俊成女

雑はなさこそのかれふに開さえてみさ河も霧しけけり

は定家卿と

なにはやわかのうらに霜かれの秋風もさそふ月かけ　権中納言為重

於西園寺入道前太政大臣家十首歌り

津守国助

いりえなる汀の霜かれたなひくなにはの月のさえまさるかな

百首歌奉りし時定道

従三位雅家

なにはえやあしまの波にさやかなるかけもすみける月のさ風

題しらす

源義種

霜さやくあしまのかけにさえて夜半の月影もる風

平貞時朝臣

志賀の浦や[illegible]

権中納言公時

秋やのこるまつ[illegible]月[illegible]経継

弘長元年百首歌奉りし時寄月

従二位行家

もしほやく[illegible]月のかけかな

おもひ[illegible]せ行ふけり

順徳院御製

しほかせ[illegible]月のかけかな

百首歌めされし時

きよき[illegible]月影

弘安百首哥に

庭は庵ちかくみえし山川の出かゝりのくいくみつ月かけ　従二位隆博

延文二年百首哥奉りけるに　宝篋院贈左大臣

ふるまゝにやまかせさはくさすかにもやとる冬の月

影し涼

延文二年百首哥奉りけるに　前大納言資季

谷の月ひかりとなりて影たえぬ山路の雪のかゝりけり

千五百番哥合に　等持院贈左大臣

ぬるみや月影はてゝ小夜ふかき雲とはなれて行らんかも

醍醐入道太政大臣

宿ほとりとてひゆく波のうへに月にたえさらぬ

百首哥めされけるに鳥　御製

風ふかみのさそひしひきえたえてやむかしとそなる

文保三年百首哥奉りけるに　前大納言為定

夜半のなかにみえしを波のひとつ浪のゆくらん

うきねのたにとも二首哥にうき浦千

鳥　左近中将親雅

なかへりとさそとふねらの雪の光とそのなかをみる

題しらず　伴國清

[illegible]

貞和二年百首歌奉りける時　按察使資明

[illegible]

延文二年百首歌奉りける時　宝篋院贈左大臣

[illegible]

題しらず　源氏頼

[illegible]

嘉元百首歌奉りける時　贈従三位為子

[illegible]

題しらず　[illegible]門院安藝

[illegible]

貞和二年百首歌奉りける時　宝篋院贈左大臣

[illegible]

題しらず　権大納言公通

[illegible]

百首歌奉りし時　左大臣

ちすみおもちやらて泥水のかけれいすゝしき波哉

題しらす　二品法親王承覚

さみたれのあまりに結てしみもとまらぬとまあらぬ山河の水

正三位成国

浅からぬ淵のみなかみいはかれて岩ねのせ水まつや山川の水

百首歌奉りし時氷

前中納言實遠

松かけの清水も岩にせかれてゆくせもなしの山川の音

おもひしを

藤原長秀

さみたれは浅せの淀みなしほりよそのつきは橋

貞和二年百首歌奉りける時

贈入道一品親王尊胤

おなしきや世にふる程のやこゝろかへしとそらは老の波かな

題しらす

惟明親王

河なみをせきとゝむれとよとみにておなしこゝろやうつれ流るゝ

冬哥中に

従二位家隆

しくれつる名残の雲もきえはてゝ嵐の山に月そすみける

後二條院御製

露ならぬ玉笹の葉のさやかなる月影すめる秋の夜の空

百首歌奉りし時露

入道二品親王尊道

あきの夜のねさめの露のおきゐつゝ涙のこほるゝ袖の上かな

弘長元年百首哥奉りける時おなじ心を

常盤井入道前太政大臣

かり衣霰のをしくかたはたえまなく帯しくてかりまさる嵐の鷹の郭

題しらず

源頼之

春ぞとは霞にもいとゞたちあやまときさかる色みゆる里の春

延文百首哥の中に鷹狩

宝篋院贈左大臣

はし鷹のみのしろ衣ゆきをみてとりかへしつ

おなじ心を

源貞世

ちる霰にうちはらふやましたの志ばまやとりとりてかへりてつ

延文百首哥奉りける時

みかりする交野の小野の夕くれにあまきる雪かさむくもなし

前参議雅家

百首哥よみ侍りける

かりくらす交野のましば白妙の雪にかくれしはし鷹の声

皇太后宮大夫俊成

百首哥奉りしとき

かり人のかたのゝ原をたちくらしおなじ道やすゝむらむ

按察使資康

題しらず

寂真法師

みかりするしばのかりほのあはれにもまくらさびしき我たつ

弘安百首哥に

前大納言為道

おのさとはしられてさしも有名の此浜のあふろたなにはまてら白雪

百首歌めされし時庭雪

御製

夕霧もまたかはそれかあはれなかめまと庭の雪のいつれ[illegible]

暁雪をよませ給ひけるに

亀山院御製

おほゐ川山のたかねりよこ雲をまてふもとそしらる雪

題しらす

藤原雅経朝臣

さし[illegible]の庭のおもての[illegible]きみして雪にかかる松の梢哉

権大僧都経賢

月なれや雪ふる夜の[illegible]雪の明ぬるまかれ山の端

うれへしらん

近江の山をたつぬるは我やとに[illegible]のくれを[illegible]りし雪を

逢雪を

従三位為理

はるはまた[illegible]るをみてそ[illegible]てへきて[illegible]す庭の白雪

名所百首歌奉りけるに

前中納言定家

わか山みのおもしろきにそ[illegible]てかはたつ[illegible]雪

雪の歌の中に

前大納言為家

やまさとのそれは山風のあらしのころは雪にそありける

津守国貴

宮[illegible]ふり[illegible]ときみてまて[illegible]雪[illegible]さらの庭

後徳大寺左大臣

さくら花雪とまかひし山の雲[illegible]の雪[illegible]

樵路雪といふ心を

源通氏朝臣

[illegible]やまひとのつま木の[illegible]雪[illegible]

花の歌

津守国助

吉野山ちりくる花[illegible]雪かとそ[illegible]

法印顕詮

みよしのゝやまのさくら[illegible]

源氏経朝臣

[illegible]

源有長朝臣

[illegible]

八條太政大臣の家に歌合し侍けるに雪をよみ侍ける

仲実朝臣

いにしへの[illegible]

弘長元年百首歌奉りける時

従二位行家

[illegible]松の下庵

後鳥羽院に奉りける百首歌中に

光明峯寺入道前摂政左大臣

[illegible]人の[illegible]

百首歌奉りし時恋哥　　左大臣

夢路にのみとみしゆめさへかれにけり契りしまゝのむなしき床

寄書恋　　入道二品親王尊道

うらみわび君その面影を忘れてしあふよのみちのゆくへかな

萩にそへみしかへり来ぬあひみての名残ばかりの花の露哉　　源義将朝臣

題しらず　　法眼行済

こえてゆく日数のほど(?)も数(?)つもりけり逢見ぬさきの恋の白雪　　法印浄弁

周防哥よみ侍りける

山家をみなもすみ恋の哥よりいかになれあまてる神やまもるらん

和哥所にて六首哥奉りけるに　　寂蓮法師

山人のみちにしられぬ思ひもてゆきかへらぬなかの(?)ゆくへなれ

嘉元百首哥奉りける時　　贈従三位為子

忍ぶるもかなしやいかにおもひねのさめてもみえぬ恋の夢哉

題しらず　　前大納言為世

うきにそへ思ひかへれはむかしさへかはらぬ恋の涙なりけり

千五百番哥合に　　小侍従

あはれとてかはしもせよ忘られし昔の人のつらき心に

題しらす　式部卿邦省親王

庭に残りつもれはつもる白雪の色代てしもの雨あはれなりけり

文保百首哥に　後三条入道前太政大臣

松かせのをとさへさえて吹くれはまつなみよりそ雪になりける

海邊雪　元可法師

しほれあしのかり寝の床代さむしろにふりそふ雪のあまのとま人
おきつしほ風

同　権中納言為重

わたつみのはまをしらなみさえくれてふきしく雪にあま路まよふ

題しらす　従二位頼政

我かとも色まちかねし雪の庭ふみわけかたきあとそ見えける

卜部兼直

雲のゐるみね代えたつ雪にしらねとも深き雪のふるをいかにかくらす

源頼春朝臣

さゆる日は代たえすふりけるすみよしの松のはにふる雪も深くなり

前大納言為成

すみよしのあさなあさなにふる雪のゆふへたかねにふりつもりけり

唐竈煙にて事代にみせ侍りける

寶篋院贈左大臣

ちか人をまちかねし夜の雪の中におもひのこらす見る人の跡

ならはすの松にかゝる山の雪の中にをりしも人のいつもまつらん

百首哥よみ侍りける中に

贈従三位為子

いはでてらしつゝとそえん人のする身をつゝまゝてかゝるそのゝちの夜

雪中歳暮を

光俊朝臣

たか里にかへつらぬとしくれてはらふ雪のふかくなりゆく

題しらず

前中納言定房

吉野川わかれてすゝむしら浪のはやくもすきにけるかな

正中百首歌に

権中納言公雄

なにとなく世のいとなみにまきれてはすくるとし月をしらぬ身そうき

歳暮の心を

信實朝臣

くらしつゝやすらひかねの夜はこそあれつもりそふるとしの松かね

嘉元百首歌奉りける時

入道二品親王道助

あれはてゝ露のまかきもむかしよりちらはさむ年ふるほとそしらるゝ

延文百首歌に

太政大臣

更ゆけはおとにもきかぬ松風にちらぬ木の葉の年をふるかな

貞和二年百首歌奉りける時

入道一品親王尊圓

ときはなる松の緑の色かはらぬはかりさしもおもはゆるかな

のこれる

新後拾遺和歌集巻第七

雑春歌

貞和二年百首歌めされける時春

花園院御製

かくしつゝすきこしかたをかそふれはもゝとせちかき春にあひぬる

進子内親王

なからへておほつかなきは春にあふめくみにもれぬ身にしありけりや

寛和二年殿上の歌合に

大納言經信

かはつなく沢のそともやかすむらんをちの里人春をまつらん

朝鶯を

入道贈一品親王尊圓

いそのかみふるき都の鶯もなれてはきなく春の朝あけ

信雅法師

いはねこす春のあさけの鶯にねさめてきけはあかつきの声

前関白

うちはへて春のあしたの鶯はなくねもともにのとけかりけり

権僧正頼仲

あさゐるや鶯のこゑきこゆなり霞にこもる春の山里

為定朝臣

春の夜のあけかたちかきまつかせにかよふ鶯のこゑそきこゆる

従三位定之

暮かゝれしくるゝ雲のきえそめて峯にはみえぬ雲ゐ行けり

源兼氏

さかしすむ野原くらむまてひとり霜にけらしなむも

権僧正興雅

ゆふしきの空の雁か音すまよりゆくかなしたのむかなるしも

三善為連

いつとなく成ゆく空の清きやみちのきえの雲ゐとまらん

春の夜とて

津守国貴

まれなる心ぞすくなきものあはれ袖に涙して春風ぞ吹

瓊子内親王家小督

こなたなる花はいつもそ月やとも袖まてかをるまゝ吹

山階入道左大臣家十首歌に春月

源兼氏朝臣

峯さそふ風はしけてそ春なかくかすみはかなをのみそれる

後醍醐院みこの宮の御時三百首歌詠せさせられける

又おなし心を

前大納言為世

今すむも春に心や霞みけん春の心に猶てみえき

前中納言定宗

春の夜はなにかともなき霞にや月もおほろになりにける

文保三年百首歌奉りけるに

法印定為

むかしより光そかはらこそてらす浦そたえぬ春の影

題しらす

清原通定

老らくの涙のよるもおもひそかすむもわかぬそらの月

たえてみる山辺もひのかけなからゆくへそきえてたえます

なりにしふるさとのおほろ夜の春の月かな

権中納言公雄

すみなれしさとをわすれやとる霞みるかけもむなしき月

百首哥たてまつりし時春月を

従一位宣子

おほろにもすみにけむ月かとみのそこそえうけそさらし

題しらす

津守棟国

咲そめし花そさきたつけふのわかれは色にそめのはなれけむ

藤原雅継

秋のふるかゝなかぬ雲のうらかれはそかゝ色は志つのきぬ春の夜の月

浄阿上人

古里の荻のほとりをとおかけてしる色はいつもかはらぬ月

前大僧正公朝

よそにのみおもひし萩はきえてはれぬ秋の野の原

百首哥たてまつりし時

津守国量

桜花霞をへたてはかりさそひけむやまのはのとまりけん

題しらす

道甚法師

わか宿のはなのさかりにとふ人はしらぬやまさくらかな

法印寳性

さくら花かすみにかくれのひさしさに風もさはらぬ山桜かな

前大僧正慈鎮

山さくらをりしもしはしみてしの中をあたれはそへのかなかりけれ
人の花をさそひて行人待はなに山花も

中務卿宗尊親王

みよしのゝ花ものうき世の山かけにあれはてまくもをしきさくら

題しらす

散りまかふ花に心をさそはれてさくらのみねのかすみの袖かけのあまつ雲

式部卿邦省親王

権大僧都經賢

それとなく花は折りみてかくれかにそれとも見えぬ花のけしき

源經政

神まつる花のあたりはさやかにて風よりさきに散る花の糸

寂真法師

さくらはなちるをさくらにまかせてや山のさくらも残るとも

弘安元年百首歌奉りける時

法印定園

かくるともつれさへかへて花ちらしさくらさかん

花の歌の中に

津守国助

夜のまに花やうつろふかこの花の朝けかな

前大納言善成

ゆくらるむくつのやとる鶯もさへなくはなとかあつき風かな
法印頼俊
あふ坂の関こえゆくもかりかねのさえわひて鶯なきけり世の中
藤原為茂
山里はさそのゝふかきところなれはちりてもゝれぬ花の色かな
法印源全
さ雲とて今日かへりは山さくらさかりのほとを思ひやるかな
深守法親王
風にそなひくかすみやまさくらちるをもしらぬ花の梢に
春のうたの中に
後鳥羽院宮内卿
そよ吹かせもたゆまぬ花の梢かな
文保三年百首歌たてまつりける時
二品法親王覚助
ゆくしれ花よりさきにちりそめしさのゝやまの春の名残を
前大納言経継
あふ世にはさらに残らぬ春のさかりを花のいろにみる
題しらす
禅月法師
思ひ出のなきみにしもあらぬ春ともしらぬ花の色かな
賀茂雅久
なき花のさそもあはれと思ふらん
大江広房

山陰の杉葉の花はのこりけりさくらをあらしふくやおしむらむ

信専法師

うらむなよ我ともしらぬ山のさくら花散の春に遅きをと

静円上人

春ことにうつろふみそあぬやとや杉むもくらてちるそれならん

らかん人もこゝに

みやこには我静もうつし花春こともかけ里はなかるもふ

落花の心をよみ侍りける

覚性法親王

木の本に散らすな花はひとゝもさそひみえさそ庭に吹風

題不知

道英法師

散りぬるは庭かりけり木のもとにちらぬ雪をはかるらん

源義則

ちるはなの花を庭もとかへしあるなくも風

源頼隆

桜花の雪にれりはこまあしちりやきさやまさたかね

津守国夫

年をへて見るかりなれか春のひかりも山の霞白雲

浄家法師

散るさかの庭の花木のかけそうつさけれとちるらん

藤原基任

庭のひつらむやかけのみはくれんけりてはるの花そちるかな

源頼貞
旅ねせし雲をわすれてくらしはあしまゝさるゝ花のした陰

正三位通藤女
よそにのみ物うく見えし山川は世のうけさるゝ浮橋

源頼康
山桜ちりかはる世はとあてせてちるもしれ木花さそはれけり

水上花といふ事を　為定朝臣
山風の河よりすゑにさきてちるらむ花のさゝ浪

題しらす　源義経
ひとりのみ雨にそほちてなへてもよせくるしきの道

春の歌とて　素性法師
たつねつる草のあさみとり野原の霞はむかひよりたつ春

雲雀をよめる　権大納言忠光
かへる野を野原の小松庭みせはあかてもしつむ夕ひはりかな

法印慶運
雪もえぬ山のさわらひゆふひかりあかくもまつの群はちりて

貞和百首歌に　前中納言為季
五月なくいつとのさをみせはゆけりとはきゝ並をもみる道

春の歌中に　源義将朝臣
さくら川をさせはやちるみつ花の色にさやかなる

題しらす　摂政太政大臣
袖にもむかしをしのひてちる花のいろはかはらぬ宿の花

法眼頼英

うの河はいそとか紫をみて花ちりうかむ流れ山の花

平重基

やまと路のゝそのかみよりも年をそへ老山さくらの花

源重之

むかしたに花をしも見れはいさしらしいつとはしらぬ身よさからん

中位織部より花かて侍りし花枝上藤皆以筆哉

民部少輔資宣

今すら山杉よりけにはいなりあし花をしき散いし花さく

哉しる頃

儀同三司室

花ちりし山さへあれてのちはしらぬ人めもみえぬ花やまへん

前大納言資名

おしなへて風をいとひしかひもなく花の名さへちらてかはらん

源高秀

たのめしの花のこゝろはうつりや散てなれもあはれとみなすらん

藤原宗遠

松にかへりみてもきしとふきあらしにちりてふるの葉かな

左近中将具氏

あすまての命のほとはしらぬ世にかはせていつれあはれとおもふ花の陰

前参議雅有

弘安百首哥に

今すらぬ花はさかりを春の夜とたのむの別や惜しみなん

首夏入ら春を

権律師植縁

大井河くたす筏とめぬ夜のみなれもさきの月に白波

夏卅首中に　　　　津守国夏

なそさらて夜るもなきてさそ花の露のうへなる形見なりけり

　　　　平師氏

夜山の河筏の小舟里近み花や蛍のもすそ野に木の下陰

文保三年百首奉りけるに　　　　前参議為実

五月雨はいとゝみかさもまさりけり筏のさほもとゝかぬまでに

延文二年百首奉りけるに郭公を　　　　前大僧正賢俊

いさ旅なれぬ松のことはりてくらふ山さやかに聞ぬ郭公かな

　　　　権律師承恵

めくりあふ松の木かけに涼みして夏をわすれぬ夜半の月影

　　　　信空法師

待わひて山郭公今はとて寝られぬ夜半に一声なりけり

　　　　昭覚法師

郭公なほこそまたれ山河のみなかみ遠き声の聞けば

　　　　二品法親王承覚

したふ年をまちし郭公今はたゝ月の夜ころにまたれぬるかな

　　　　法印源意

またきより声をたつねて郭公ましてしのふる夜や更にける

文保百首哥奉りける時　後二條入道前太政大臣

さらにまたかれてそのほかはさきのよくもひとやまた絶え
都をとほく事を

前大納言為世

治世風さへ成りにきやまれてはるかにききそやみやこの明ぬ覧

聖尋法親王

絹にしく我ならむもとむかしの坂をなかめても都にのこる我身なりせ

法印隆淵

しきしまの道をわすれぬ都をも猶つたふるかなしきにあめ[illegible]

貞治二年百首哥に

大宰権帥為経

都にはきのふの花はちりぬるをさきにゆくやかよひのみよしのの

小辨

思ふことかなはすはせめてかはるかたをきゝてこそあはれをまたむ遠

夏号中又

藤原永行

いくとせをすきてもなほやきかれぬ都をとめてさとへのかよひなれとも

法眼良慧

出てゆく都をきけは都にもたえはてしかなしにもをまつなり

祝部成廣

都にも帰らむとおもひこしかたもみやこのひかりかはかはらぬかたの事ならき

よみ人志らす

明ぬとてなほすむ都にひとこゑはあれとみかたの郭公
藤原宗秀
ともすれはすきかてなきよはふけぬれは月のかけ清き
昇殿ゆるされける比郭公の歌
卜部兼雅朝臣
まれにまつ雲井の人のほとゝきすおなしくはあつ初音をそきく
題しらす
藤原基名
まつ人のためならすともほとゝきすそのさつきまておとつれもせよ
源経氏
白妙のいそにぬれてあやめ草うきみかりいにひくよしもかな
卜部兼直
をしなへてたかきにかけぬあやめ草さこそうきねのかゝりけれ
前内大臣実
雲かゝる山のをのへのさみたれは晴ぬ日かすもなりにけるかな
平貞秀
かはらにみたしてまれはなにはえのしけきあしまもあさみえぬるかな
紀親文朝臣
いつまても日かすかさなるあすか川かはらぬ淵やさみたれの比
橘遠村
をち川の瀬々の浪もそひて岸をひたすあまりまさる比
河五月雨
為名朝臣
広瀬川みかさまさりていまさらにはやさまさりてさみたれの比

題しらす　源光正

水まさるさはのかきつはたえなかりしにのこる五月の雨の色かな

源氏春

さつきあれは(?)たかせのよとのなかはかり早苗もとらぬ程そあやふき

ゆふくれはたなのゝさなへおしなへてなひきてすゝし山のしたかせ

よみ人しらす

海辺早苗といふ事を

前左兵衛督教定

早苗とるたこのもすそもしほかせにうちよせる浪に袖ぬらすらん

題しらす

前関白太政大臣

山水のあふ浦せそいつまを清うかきのさなへとるなり

平常顕

水くきのをかへのそともむらさめにぬれてやさなへとるらん

多々良義顕朝臣

日もすからとるやさ月の早苗かなかき袖すそもとる早苗哉

浄弁上人

古郷のあれにしをたもまちわひてしの袖のさなへとるらん

百首哥奉りし時

権中納言為重

のりかへすさなへのかりはをやまたのはらへてうへん袖のしつのを

文保三年後宇多院に百首哥奉りける時夏哥

忠房親王

橋の名もむかしは世にかはりけり昔の淀の渡りとはいふ

題しらす　源基時朝臣

さきぬれは花のさかりもいまはのみなとみえぬる

聖統法師

やそさとやうらへめくら夏野ゆくさとしの何のみかさ嵐

藤原為量朝臣

夏草はしけりて志賀の浦波もかゝる軒端をたつらへみえの野杯

法印宗信

椎柴の我その京のそらあはれてよそに見ける

道元法師

山の端の月のさしくる月はけてひかりもみすとかはるか

読人しらす

里の名を月にとよはふかけにかくるやひかりそふ光

述懐の哥の中に

代々をへて我家の庭わかれし哥みえる蓬生

権大納言時光

文保三年百首の哥たてまつりけるに

前大納言為世

風ふけは浪にきえぬさくら花散るとも花にさくの色

廟にとふらひて

大中臣頼基朝臣

うちむれて見しあさみとりやよひの空のまさしき風

題しらす

前参議経宣

ちる花をさそひけるやは竹とかくふきしほりぬる山の嵐は

文保三年百首歌に

後花山院内大臣

花さかりあらしのはらひさそひ月は夜ともみえぬ雨のなかし

題しらす

源詮政

志からきの外山はやむとも風の音すのかたちにふくらむ

秀幸法師

松風のはやくとなかれやまぬかはいて山の嵐にのこるさき

よみ人しらす

いにしへの志賀のみやこの花さかり昔のなかりせはやかは

瑒子内親王家宰相

みよしのゝ山やまほとゝもゝやる夏かけてさかるらむ

よみ人しらす

なこむその秋の夕くれは山のせきにてちるらむ

新後拾遺和歌集巻第八

雑秋歌

題しらず　　土御門院御製

かゝるまは袖の露をもしのへともさそやみえけん秋の初風

僧正実守

おく露をたえぬ思ひのなみたさへいかにみるらん秋の初風

百首歌奉りし時早秋　　深守法親王

吹よはるわかの松かせそよきてそ秋の夕世

おなし心を　　前大納言公蔭

涼しさをまたおほえぬも秋ならぬ袖にしるしの秋の夕くれ

式部卿邦省親王家五首歌合に初秋風　　頓阿法師

ほのかにもきゝてそ風のけしきまてかはらぬ秋はきにけり

題しらす　　為兼朝臣

吹そめて末はゝ涼しさもなかりけり秋やこのたひ成ぬらん

七月七日信若くわかれの雨のひまもなきさに

とまるとは見えぬものゝもなとて河原にたちさり

津守国夏

ひとつゆく

これまたはまたひとつの心あまの川いつかわたらんよそにふるらむ

百首歌奉りし時　　藤原資衡朝臣

一枝も露なから折てみやこ人に家つとにせんみやこの人

ちかき露をとらせ行らん

後二條院御製

七夕のちきりまつまの涙をは中に一の袖ややとさん

内裏十五首歌合に秋風を

前中納言定家

秋されは民の草葉もいろかはりひくはよる秋の枕の露

題しらす

清原業宣

風の音もしのひそらけれ萩の葉の上に秋をしらせて露やこほるん

前中納言親宗女

[illegible]

平実河朝臣

露をこそかはひもそめうつろひて萩かえこそ藤袴の風

大江氏元

わけゆくやすそにそめんあさ川せのわたりに秋萩の花

為道朝臣

露浅く見えん待つらん萩の下葉のもとにあふや袖よりも白露

延文二年百首歌たてまつりけるに秋夕

大納言顕實母

むらしら雨のをそ[illegible]秋のくれ

袖のうへ色も[illegible]　道鷹法師

題しらす

よみ人しらす

そのとほくそ[illegible]秋はなくやあはれ[illegible]のゆふくれ

前大納言為成

秋の田にかりねするよはふけにけりかたらひかはす庵の内

権僧正増瑜

秋をまつかりのいほりは我宿のいまは葉の風やさそひきぬらん

式部卿邦省親王

秋きぬと色にはみえてあはれなりたなはたつめのけしきにもみえてさひしさ

貞和百首歌に

左兵衛督直義

置露のをきつるなかをあけてけさのまになりぬとおもへは我手のこる

百首歌奉りし時

津守国量

秋風の吹まよふきこゆるは荻の葉そよくやとやあるらん

題しらす

素観上人

みなと田のいなはの風のそよかりて秋のゝ波

前内大臣

吹風もとわきたのかはを吹たてゝむさしのをわたる秋霧

秋田をよめる

為道朝臣

夕されはいなはの末を吹とよみおきそふ風をうけて秋風そふく

前中納言定房

村雨のなことひきて住られ秋田のいなはを風そふく

題しらす

雄舜法師

秋の夜はなかき思ひはかきなれて猶ねさめこそ物ませられけれ

よみ人しらす

あかしかたいさらに雲なき浪さえて浦わたりける夜はの月
藤原為量朝臣

おしまやらむともかくて千すけれはくもりうきかねのあき月

応安六年九月十三夜内裏にて三首歌講せられけるに月前雲
権大納言為遠

まちいつる月はあかりのゝ雲にかくれさよ松風そ吹

題しらす
権僧正良意

月もなほ木の葉かれゆくおとをそへ山秋ふかく何か見えし

文保三年百首歌奉りけるに
後西園寺入道前太政大臣

昔よりいろしれぬ家もやとり来て月さえけりのやまぢめる

題しらす
前参議長経

月影も露の底よりやとるらん草葉にむすふ秋の家

夏日歌中に
後九条前内大臣

河のへにさしもわかるゝころ雲せよめとて月そさやけき

文保百首歌奉りけるに
民部卿為藤

大井河せゝにおりゐて秋のみそきさにいてゝ涼しとやの月かけ

題しらす
藤原昌家

秋風ふかくおとにやけるにはれたかき庭の月影

津守国冬

あしのやにすむあまやくもる月ならはそふかきにかゝる舟

宗金法師

わすれなよよゝの契りをてゝ撫木のむすひかためし末の行末

祝部成仲

いのちまて世にあらは何を思ふらむ月もあはれもそらなるへし

藤原雅朝臣

鳥の音は嵐にさそふ鐘につれて峯よりいつる有明の月

文保百首哥より

六条内大臣

いかにせむ山の端ちかき月影をかたにたえて寝覚にそみる

光明峯寺入道摂政家三十首哥より

後深草院弁内侍

なく鹿やまたき寝覚の声たてゝ秋の萩原成行ならん

百首哥奉りし時に

従一位宣子

松むしのなくとも聞えて夜もすからあさちか末の露のよな〳〵

題しらす

源高秀

やすらはてあまりに残る月影をなかめて秋の山のはの空

丹波忠守朝臣

うき物はなからへとてもあはれにも月の夜すからなかめ来し

源頼之朝臣

あはれにも思ひやるかな山川の声さへものうき虫の音

貞和百首哥めされけるついてに

光厳院御製

侍んやまかくれたるいほりは嵐にあて枕にちかき峯のまつかせ

題しらす　　　右大弁秀長

たつせ山松の風のをかりのつれすもあきのゝ松はまさこえつゝ

一品法親王寛尊

ら我のむすめさめて友となりける鳥のなくなる夜半の暁

為基朝臣

これわたる我袖や露をいてゝむしの声のをとせぬたえ間かな

儀同三司言

月影は光さしそふ露の秋やさしき峯の風にまた露そかゝる

貞和二年百首歌の中に

後二條前内大臣

露のまとたゝかに松をもおもひわすれやすき心あるこの世なれはこそ

題しらす　　　安嘉門院大弐

物思ふたにあはれはまさる山里にまたしもいかにねさめしてなくとり

藤原朝定朝臣

それとなく心にかゝるみねの嵐にいかにまくらのよそにゆく

よみ人しらす

志られせぬかくれ家にすみて我身をはなほすみかねて

大峯通り侍りける時笙の岩屋にてよみ侍りける

前権僧正良宋

おのつからやとかす苔の衣手もあまたゝひのゝ露にぬれつゝ

暮秋紅葉を　源頼隆

あきはてゝ志くれもしらぬ秋の葉をそめつくしぬる嵐なりけれハ

暮秋月を　藤原朝臣

長月のありあけの月のほとりには残菊いろやかはらぬ千よの秋

題しらす　權大納言實香

冬かれハ霜はおくともかはらぬハ色もかはらぬ千とせの秋

残菊をよめる　光俊朝臣

うつろふも色ハかはらぬ残菊の花の色香をとめてこそみれ

松の下の菊を　中務卿宗尊親王

霜枯ハ冬にそなりぬ松のもとに残菊の花色ぞのこれる　源經氏

ありともとおもふはしら露のおくにそ残菊のいろ　元可法師

冬なから秋の志らきくうつろひてさく花よりも色そめつらしき　道誉法師

色々にうつろふ菊の花さかりみるほとも猶残菊の色

冬哥中に　藤原懐通朝臣

白菊ハ霜にも色をかへすしてまつのこるらん花の色かな　藤原行朝

あきはての後ハ木の葉をうつろひぬ残菊さく

松風に残菊を　鎌倉右大臣

かれぬ種もまたしも残菊の木の葉のちりて後の松かせ

百首御歌の時竹を　土御門院御製

くれ竹のみとりは時もかはらねとしくれにかはる籬そしるき

おなし心を　　権僧正経深

ゆふまくれいはねをつたふやま風にしくれてわたる峯のうき雲

人丸

やま河のみなかみしらぬみなわこそなかれてもなほきえすもあるらむ

延文百首歌たてまつりし時落葉

　　　　　　　　　　　　　　　　前太政大臣

みなの川みねよりおつる流のうへに紅葉はみたれなかるれ

題しらす　　　　　　　　　　　　寂蓮法師

紅葉はのなかれてとまるきしもなしちりそふ水のあきのゆふくれ

　　　　　　　　　　　　　　　　権大僧都宗親

秋ふかみうつろひそめしあさ霜のふる庭のしら菊

　　　　　　　　　　　　　　　　源直頼

さむき霜よのふれは庭にしら菊をかはる時もみえそめにけり

百首歌たてまつりし時霜

　　　　　　　　　　　　　　　　前関白良基

ふけてさへすまやの月はきえしくれぬ霜にむすふ

題しらす　　　　　　　　　　　　藤原満親

風さむみ夜半のあらしの霜よりもおきてさゆるたえぬ

　　　　　　　　　　　　　　　　従二位成忠

なにはえのあしのはにしもむすふらん

建保四年後鳥羽院に奉りける百首哥に

如願法師

月きよみねられぬやどの庭は白妙のおきゐて袖にかけつ初霜

題しらず　よみ人しらず

しくれとはなにか梢の木の葉にはいろはかはれどもおなしかな

百首御歌の中に

土御門院御製

吉田山のみねやまれにかゝりぬらん汀のなかに志かまの鐘

題しらず

式子内親王

筑井はいめのゝ原を見ぬ人や月をば秋の物といひけん

是法師

秋もたゞ山路はてなきみ川よりさやかにすめる月かけ

権僧正圓守

さゆる日のしくれとゝもに山川の志たは氷のこゑやいそく

澄覚法親王

冬の夜の霜おきそめし松か枝はよは井の水はこほりそめけん

源和義朝臣

きえやらぬあやうき山みちもとめかねのこゝろにかゝる世の露

法印長舜

ちからつきてなきぬる枕もねられぬ故郷のとの夢

よみ人しらず

さすかにもみきはやうつさ秋とりの都にしに近く

喚子鳥といふ事を

いく代さりありやと誰とめてまちくらし諸ふ友をよふ
前関白 左泉

あたこの山井の寺にすみ侍りける時よみ侍りける
侍る音は中々に濱千鳥を

なかなかに人を忍ふてよふこ鳥こたへむ山の木陰やは
花し頃
慶運上人

山本の能あるわれたちて日影よりさしてそ花やのこらん
小槻匡遠

ふる道はかけ山口にはまよりめ語代ゆふ志らせん
前中納言親賢女

志らせよわかなし友おとりし後今すみそめて行けり
三善為永

世中の秋はさそふたにてたもやきし秋の地ともきえ
瑞子内親王

雲まよふたにも家はさため河ゝよせ玉もあとをたにまよふら
前大納言隆房

百首歌奉りし時よみける
民部卿資遠

大井川のせみのなみまよりて浪の花もあたりて語まてゝりて
松のしけく
源和氏

あかなくもむせふ涙にくもりつゝやまのはちかくのこるともし遠

題しらす　　信快法師

いけるよのたのみすくなきみをしりてなにゝてやとおもひなしつる

前関白左大臣

ひとりのみおもひやるらんとかくてもおなしこゝろにたのむこの法

円照法師

法のはなたえにそひてのちの世をかけてもたまとよそしれ

前大納言為家

あしたつはすむやみねふかきしたをかせかはらぬまつにのこる雲

通源上人

たのむへきみちのしるへをたつねゆく世をうしとみるやまのおくかな

延文二年百首歌に

前中納言有光

かりそめの世のはかなきこゝろをはしらてやまとにむかふ事にそ

題しらす　　前大納言為家

わかみにはかれたるなりけるものをおもひのこせる雲にてて

照祐法師

かくれなきこゝろのうちをしるもの君はなれしとおもひぬる人

源義法師

うきことのおほかるよにはなれつゝこれはおもはぬ白雲

延文百首歌に　　権大納言時光

おほかたのはかなきよをはなれてもかけかよふつきのかけ

題しらす

春も待草も待てさくやけふさかりにさける白菊

紀親文朝臣

あきふかみにほひもかはる霜のうへにうつりまさりけれ

後徳大寺前内大臣

移りてこそかれぬ庭は霜をわけてかれたる菊の霜とさかん
霜のおくにたつかをくらりぬる

賀茂定宣朝臣

なかつきのすゑなる菊の霜のうちに紅葉の秋そ残りける
なし

等持院贈左大臣

世のうへに今こそ色のうつろふとかれて残りぬ庭のしら菊

前大納言為定

延文百首歌よみ侍りけるに

摂政太政大臣

あきふかき宿のかやとも行人をとゝめまかれとれかれと見る菊

題しらす

権大納言宣明

代をかさね遠からぬ秋の契りのこして千とせの白菊

内大臣

いくかへり霜におきてもかはらぬは君か庭の白菊

権大僧都経運

あかねさす秋のかたみやしもかれの秋のはてにも白菊

延文百首奉りし時

摂政太政大臣

時しあれはこゝのへにさく花の色もさそ三代にあひて
夏たつ春のくれし時鳥
侍従為敦
庭のおもは我からひとりこゝろにてこれ[illegible]
[illegible]のかけをいそく[illegible]
ゆくへもしらす[illegible]とさそふかな
中[illegible]
周防内侍
ひとかたに[illegible]思ひやる[illegible]のこゝろ
なし
中納言上總
きえもやらぬ[illegible]の[illegible]

題しらす
山ふかみ雪よりのちの日数にも[illegible]
滿蓮法師
ちりたる木のもとに[illegible]
性阿法師
[illegible]
権律師則祐
[illegible]
紀盛家
[illegible]
沙弥能阿
[illegible]
道増法師

すみのえの岸にさむ藤波のあをやかれや松のつゐまちなん

よみ人しらず

あかりつむ雪にかへりもとみんためのよりかたきおれみかな

題しらず

大中臣行廣朝臣

わかせこかりあつめしを寺へれとも橋のを帯とはおもはん

藤原信良

いつしかと秋風ふくや波のやくよするすゝの波かな

権大納言宗通母

うちわたすとはいはね書やゝもの見えかくれなかる

前関白　家

昔人のいはくゆくはそれとおもひしや蓬のかく

花山院御製

ほくしかありしかはれ月さへ流されはいかにうきよすむへき

歳暮の心を人々よみ侍ける

京極摂政前太政大臣

すゝきちる月のほとはおもひてやまとなりけむかくれなかる

新後拾遺和歌集巻第九

離別哥

題しらす　　権中納言敦忠

わかるゝをめとしらてあやなくはわかれをしのふことそかなしき

中務

はつそらの人の身やしるらんしらくもゝなかれてもとのそらにかへらは

大江のちふるさとのへゆきさらふ君かゆく末をみつゝやなけかむ

中納言兼輔

あかすしてわかるゝ人の袖のうへにみえかくれなる月そかなしき

題しらす　　源兼澄

わくらはにあひみてすくるとしなれはそれさへわかれをしのふ身そうき

とさの国へまかりける時ゆみのとたかく中をはなれける人

ありとたにきこえてやまはなれなはおもはむとのみたのみしものを

藤原高経

とさのくにのとさの国へまかりけるに

ゆき人へ遣す

なかれゆく身をしのふ人ありとしらはわかれてもなほたのまれやせん

中務卿宗尊親王

みやこのほかにかはるわかれのおもかけにとまらぬ人のかなしきやなそ

東にくたりけるに

女御徽子女王

いかりいてゆくゑもしらぬせとよれはやすらひにけん

実方朝臣みちのくにへくたり侍ける時たまはせける

花山院御製

たのむともなかりしひとを我すくてはいかにせよとてへの
春のへにかりなくへきは大納言師氏の餞しけるに

よめる

貫之

春のゆく雨ときけは月みやこをはなれて山田にしらるゝ哉

題しらす

中宮大夫家房

君のみやそてゆくかたにおもふらは大かたの風をしてこそ

清原元輔

年よりはくくりて立ちかへれ

藤原行朝

いくのゆとおもいおもはゝ世をつくりはなやかになりなん

堀河院御時百首哥たてまつりける時

藤原仲実朝臣

よるへなきおもひわたるにはこしのみやをはしとおもふらん

権中納言師時

たまきはるかりにはをかたまあかつきのなきにたへぬ哉

題しらす

清原元輔

かかりはめくりあふ花よくなかさねらる

よみ人しらす

命ありていつまてかいきのかすも又おもてる

百首哥めしけるに

崇徳院御製

志らすゆふへの色をもあはれと思ふ心の志らつゆに付て遂
あはれ成ことにうつろひはてぬ哀我のはてはかなしき
忙しきすきしよのつれ〳〵に宿らん
為道朝臣
思ひたえぬあはれ世にうつりかはる身はふるき心はむかしの空
題しらす
土御門院御製
朝夕はこのわかれつゆに鳴く声のあはれとも誰かは知らん
あはれ人の秋ともなく　藤原長能
哀しとはいふもあはれやわかれしにそらもさみたれのわかれを
俊頼はあはれまかりける時よめる
大蔵卿行宗

たのむへきかけもなき身はひとりのみあはれ代々の跡を遂
も師になりてくれけるはわか世にむかし律守
因幡のかみなりける時ひさしくよみいたさんとて也
侍りけるは
大納言經信
ときはなる松の緑もかはらすはみつの代にあひとはぬ
さへかや

新続拾遺和歌集巻第十

羇旅哥

嘉元百首哥奉りける時羇旅　民部卿為藤

しひてなほおもひ別しふるさとをいてゝいく日の道となるらん
旅のそらしく

ふるさとをへたつるひとへちさとのうらなみにたちぬるものと我そなき(?)　後普光園院前関白左大臣

文保三年百首哥奉りける時　前大納言為定

風となりて我やかへらむ故郷をへてひとすの浦の心にそ(?)

題しらす　平政村朝臣

都にはおもひもかけしあふさかの関やこえゆくしのゝめのそら

嘉元百首哥奉りけるに関　後照念院関白太政大臣

おもひゆくもとのこゝろのみちやすくたゝこそまよへあふさかの関

百首哥奉りし時羇旅　前関白（兼）

鳥の音にせきをはあけて箱根のやまきりのうちにゐるそぬれ

題しらす　後鳥羽院御製

古郷をへたてゝのちの夜をかさねてなれしもあはれさきひとつの浦の

題しらす　柿本人丸

ゆきもきえ春やうつりにたつたひめかすみのころもの色

小式部内侍

人もみえこまもとまらぬあふさかの世にはたえぬ清水のながれなりけり

題しらず

正三位経朝

ほととぎすたがさとのこゑにまちわびてなかなかむかしのそら

源頼貞

雲のはたてにかかれるかげみれば月かげの花のかつらの山のはの

荒木法師

ゆふまぐれ雨そそぎけるなかぞらのほととぎすやすらはで

題しらず

藤原政宗

あさ日かげさすやゆふべのかげもなく月とともにそらゆくの山

式子内親王

なつのよはあかずながめて山のはのつきをまちてねられぬるかな

延文二年百首歌たてまつりける時

後山階前内大臣

足引の山ほととぎすさのみやはまたるるころのうちにすぐさん

後光厳院御製

ほととぎすまちよはの月のやまのはにすみやらぬ夜もすがらなきて

題しらず

藤原為藤

ゆふぐれのそらにまつらんほととぎすいまひとこゑのなごりなれ

百首歌たてまつりし時

権中納言資教

いつまでと秋をしのびていのちもやどる人もなくてつきはつれなく
従二位家子
さきだゝぬくやしさもありけりやさてもむすばぬ雲のゆふ秋
前大納言基世
秋の夜の心よりこそあきの山のあはれもさそふ夜をさそふ
道将法師
霜やこれ星かあらぬかまがきの草葉ならぬしら露の山風ぞ吹く
峯こえて行くまだ見ぬかたの人もなし行く
さやの中山とて見るらむ
信正行意
あけぬとて人の越えゆく道ゆけばまたぬれてぞゆく秋のさやの中やま
題しらず
法印顕性
露ふかき夜ふかき草のまくらにやおもひねの中のひとりねやする山路
あはれ知る秋の草葉のむすぶ夢もいつまでかわれぬ夜の旅寝
法眼澄基
草まくらたびの空なる露のかぜ人をとふ月もなれぬる
しらぬ人をきく
中務大輔宗
いざなひしやとりもやせむ旅衣きのふの秋の夜やさむかりけん
八幡宮の撰歌合に羇中暮
源大膳大夫
くれぬとてなほやとるべきうちのやまべは神のやしろかな

題しらす

前参議為実

草まくら露わけわふる夜はよるもなほすつる旅の枕せ

源頼直

いとゝしのやと成やまをそれとめくりしくれてはそれかおもふ露

源親尚

わかためはむすひもとめぬかりねのとふらふやまの露やそは

しらぬ人あす

ふるさとのはきさらぬ身をはたゝはりてみれはひかりとゝ涙そ

権中納言

はるかやまこえぬひのとふるとて夜はとはれとおもふよし

刑部卿範兼

按察使公敏

おもひ寝のありてもさすかなくさむは都のそらの夢路なりけり

常盤井入道前太政大臣

かり寝するとまやのやむしろおもひかね旅ねの露けさ

暁旅の心を

権中納言為重

いそけとてあはれおきてわかれやまちかく露ふかき道をなかめゆく川霧のそら

深見洞院

川そりをこひの見えゆやあきのふしみよりふかき心をこそ

題しらす

和泉式部

みやこをはかしこをこえてかなたのこゝろのひとりの月をいまもさへみん

百首哥たてまつりし時権

都をはなれぬとおもひてそかはらぬ月に面影の宮

左大臣

和歌所にて六首歌奉りしに

後京極摂政前太政大臣

旅のよにたれかふまれなる都人旅ねの月にまさりぬらむ

題しらす

定然法師

かり旅ねの月をひとりみてたちさまよひて夜半のあけの東

道成法師

ゆきくれて山風さむき旅ねしてうきさとも見る月をみるかな

あはれ又今宵いかなる宿りにてみん

平宗宣朝臣

古郷にかくこそ人もおもふらめ旅ねの月をみるにつけても

貞和二年百首歌めし侍りけるに

光厳院御製

草枕旅のやとりの秋のよはさえてもる月に袖そ露けき

題しらす

前参議雅有

あさちふのやとりの床に旅ねして衣の袖にやとる月かな

旅泊百首歌の中に 海路

信実朝臣

月をみてこまりせし出船の身はしらすの港にとまる

百首歌奉りし時

宗賢門院

さはりのみおほかるよにはしつみはてぬるみをなけきつゝ母

延文百首哥奉りける時に

うらみんもたのみしよりの世やかはりなかりしかれの中の事をおもはぬ

前大納言為氏

題しらず

うらみんとおもふをさへ

かはりゆく思ひしられをはかなきの心の色はいつとさためぬ

源頼春朝臣

うき風のみゆきとまちてあたなりかゝる心のほかのあはれをそ

うらみしもこそ

あはれとはせめてのおもひやむすひつゝみしかやそなかれとまちし母

源秀義

かりそめにいひしよりたれかこの世にはおもひの袖のなみたこそあらん

十仏法師

なきしも我いさやはしめて涙さへしられぬほとのあはれなりけり

賀茂清宣朝臣

夢ならてむすひもそめぬ草まくらいつ秋よりかぬるの夢の

貞和二年百首哥に

等持院贈左大臣

題しらず 仁経の弟也

あはれはいかてさとれるむすひのとはにいつかやいとけなき

源頼康

草まくらあはれはかなき夢にてもさめてむすふ涙をはたて

宗久法師

むかしのみおもひそなしかひあるやみのよにねてもねさめぬ

擣衣の心を　　藤原長秀

里ものゝいつをかきりにうつ衣のおとはたえせぬ武蔵のゝ原

権大納言経嗣

あちきなき夢みしもとのかりねやとその草枕むすひをくらむ

前大納言為定

いはねにもこえしひとはいつのまのあさりかしてかへりけり

題しらす　　よみ人しらす

しら雲の人とかへりやなりぬらむひさしくはまたのこるそら

後法性寺入道前関白太政大臣に侍りける時よませ侍りける

百首歌に　　藤原隆信朝臣

たちかへりまたもきてみむ山さとのいつもかはらぬつきのかけかな

新後拾遺和歌集巻第十一

恋歌一

はしめて人につかはしける　藤原道信朝臣

いかにしていはぬをそれとしらせましなくてなかなかなりぬらむ

百首歌奉りし時初恋　左大臣

うちとけはかはりていはんおもひのうきなかやそはらにしるらむ

前関白 近衛

わすれなむとおもふこゝろのつらきかなあはてそのまゝおもひやむへき

文保三年百首歌たてまつりけるに

権中納言公雄

涙川いはせてかれなかるゝそのそのみなかみ

題しらす　相模

からころも袖のわかれのなみたこそあふせのうちにおもひぬれけれ

読人しらす

おもひかね袖にかゝるなみたこそそれとしらせてなりぬへきけれ

恋の歌の中に　従二位業子

この世にはみなかくこそあらめ涙川袖にながるゝものとしりせは

文保三年百首歌に

前大納言為定

せきかねてかゝるやせきのなかれてはあはぬなみたのふちとなりけり

百首歌奉りし時忍恋

権中納言為重

涙河そてにわたるみなかみをせきやはせさるやしのふ心に

入道二品親王尊道

しらさりきいとゝ思ひのますかゝみしのふるほとにかはる涙を

前僧正実縁

忍ふれはしのふにつけて川音のたかくもなりて人はしるらむ

権大納言公

しのひあまりさらはよそにもこほれなむ袖はかゝるを人やしるとて

正三位通藤女

うちとけぬおもひのほとをしらすしてよそにもたゝ人や見るらむ

安嘉門院四条

袖にしもせきもとゝめすなかれてはいかにせむとか人のとはまし

源義之朝臣

うれしさは涙の色もまさりなむなれてはそれとしる人もあれ

唯圓法師

見せはやなおもひにしのふそのほとも涙はそてにもらしつるかな

源惠氏

涙河そこゐもしらすやせきかねてひとの袖のしからみ

藤原頼冬

いかにせむほとなき袖のしからみにせきかねてあまる涙を

為冬朝臣

神まつるとよのあかりのさかつきに月たかくすむまさきかつら

宝治百首歌に寄月恋

前大納言資季

あはれなとひかりをかはす月影にこゝろを人にそめやらん
恋の涙か中にかはりしらん

天暦御製

月影はおなしやとりにあれとあはれなるこゝろのはなにそみえける

権中納言為重

かはりゆくものとはしらし月影のおなしはかりにみゆる秋かな

よみ人しらす

山のはのその月かけにみなれてやおもひかねつゝなかめやるらん

貞和二年百首歌に

前大納言為定

からひとのすかたのいけにおもひいてゝおのかことなる秋の夜の月

題しらす

藤原為経

あはれなとおもひいてぬるふるさとのわかれしあきのよはの月かけ

百首歌よみし時恋

源守清親王

わかれゆくおもひもしらぬ秋の夜のながき月のあはれさとかな

藤原雅朝

世をすてゝ

題しらす

源兼氏朝臣

うつりゆく人のこゝろのあさけれはなみたのいろもかはるなりけり

我こひはまつをしくれのそめかねてまくすかはらにかせさはく也

為家卿

ほとゝきすさしてしくれもあはれなれはひとりのみこそ雨をきくらし

洞院摂政家百首に

藻璧門院少将

ひとりぬる涙のとこのさむしろに又やとたにもかたしきてねん

題しらす

よみ人しらす

まちわひぬあはぬひとよのかすそへてわかかたしきのそてのしらつゆ

建保二年内裏百首哥たてまつりけるに

前中納言定家

かへるさのゆくゑもしらすなかめてもそのゝあはれにねをそなく也

題しらす

惟宗光吉朝臣

こひしなむ命はなをもおしまれておなしよにあるかひはなけれと

参議教長

人めをもつゝみもあへすなみたこそおもひあまれはいろにいてけれ

寄槐恋

前大納言為定

さそなけにけふはいつかのこゝろよりまたおもひそめしとしはへにけれ

信慶法し

思ふ事をしらせてなれはあきのよのつれなき人をなをそうらむる

深守法親王

なにとなくあはれをそへてなかめつゝおもひの色をしのふころかな

前参議為量朝臣

わか方になひくけしきもみえはこそふけゆくまゝにあてにかゝらめ

権中納言経重

とまはそてにえやうつらむあらましのなみのこなたに姫君と孫

百首歌めされし時恋歌

太上天皇

なほ浅きはりせきつらくてありけるとはしられやはせむ

建保二年内裏百首歌に

従二位家隆

ゆくやまもちかくなりてあふことのかはらぬみちもしるらむ

三善長康

しるへなきなみたにそてそぬれにけるかなしさのちりのなかのおもはむ

貞和二年百首歌奉りけるに

前大納言為定

これのみや袖の涙にたへかねていひてむそのひとは

永和元年五月廿日内裏にて三首歌講ぜられし時

忍恋

左大臣

あさしとてそのなかれにもいひおかむこゝろのうちをいかにかはせむ

わかこゝろやとひさしかれとかへりこぬ人をまちけれは

左近大将

思ふことものいはぬをわりなくも人にしられて

忍恋

よみ人しらず

いかにせむ人のうきなはたちなからしのひしことのかひなかりけり

貞和二年百首歌に

前中納言為明

うつゝにはとひこしそてにかよふらむまつのはけのさうなき

建長二年八月十五夜鳥羽殿歌合に

前大納言為家

きよはらてあまのとゝのひまのひとつかのよにもやそれはなりけれ

題しらす

基蓮法師

こゝろそむ月はかりのこのまをもかけをとめよとなかめつゝしのふ

祝部（邦）行茂

人しれぬおもひもやしらぬ慕はしかるらむ

さとはいかにそれともかくこゝろもなくあまのやとり

まんあそひにふくかはつきもかな

従二位為信

わかれこんのそこにしもゆきをさそはれいかの梅さへ花む

たゝ人しれぬを

はなたれしのそかさもあまひとの神ろにゝ流るゝあまのゆくへ

弘安百首歌に

前大納言為世

ゆきのはれそれ玉をみかきてみえしもさそなゆきのけはひ

百首歌奉りしに

左衛門督資康

このふゆのかけにそふるあめはまたるゝ古のものやそれけん

法守法親王

いかにして宮こちかくうつりけん庭ともし神の月よとてよや

題しらす　源義種

なひくらんあたゝかきにはゆふかけて浪のかせにやまかせてもみん

道恵法師

いつかれもそのあきの月のそらはかたふくまてもなかめつゝみん

前関白左大臣

絶すまやときとともにかはる神もくりそめし頃なはとつまる

百首哥奉りし時　前関白

くりそめしのりをたゝすのかみやしりてまことにかはらぬ世々

題しらす　前律師義実

すたにおもふ思やおもはてまかせし神にまかせてまかせしと

藤原師継

なかれゆくよもにしる頃やみゆるみつのゆくへのよせてを

延文百首哥奉りし時

前大納言左大臣

あふことのをりのあさひのかけやたに絶えぬくもの

題しらす　善源法師

いかにせむわかものおもひのたえぬまもりいてやらん

元可法師

いかにせんこのよのとかをいかにせむたのむのみ

源兼綱朝臣

あふことはいさゝめのもくもゝひせまて行末をやらさん
正三位通藤女

恋しさはおもふよりけになりまさるやまとのうみのさゝ
内裏にて人々題をさくりて哥つかうまつりけるに
寄玉恋
右近権頭親雅

あふよしのなきさや袖のしつくまてかへらぬ浪の月
百首御哥よ
太上天皇

恋しきをよさのみなかにおもひわひみなさそふ恋のなかい
題しらす
よみ人しらす

おもひねは夢ともいかにわすれかねて恋しかるらん
権律師祖輪

恋しさをするかのうみのなかつらさそのみ袖かわくまん
小槻益治

あふことはたえてしなきをおなしくはみをしもわれよ袖なる
恋哥の中に
後鳥羽院下野

わかみ川いかにとこそいへ身のうきをまつにかゝるそ
道因法師

こひわひてなかすなみたもやらぬ身をあはせてまつにかき
よみ人しらす

瀬をはやみなかるゝみつのたえまなきこゝろのうちの涙かな
弘安百首哥に
二品法親王覚助

わかれてはたれもやすかねてそれをもしらぬ身やすらん

延文百首哥奉りけるに寄橋恋

摂政太政大臣

あま禅にわたえぬるのさてもうき志てゝみえわたる也かなしき

寄母恋を

兼真法師

うき身をもうらみもせよゆくゑあらむもとめかたきこゝろのこかれつゝ

文保百首哥に

前大納言経継

いつはりの我かねことのあらましにことうつしてもたのみけるかな

建保二年内裏百首哥に

前中納言定家

あまのはらさえまさるよのひとりねにあまのはらあふきみるなみ

かな

新後拾遺和歌集巻第十二

恋哥二

題しらす　読人しらす

ゆもゝかの日にそふけふりのゑあみらぬ程へぬ恋地

躬恒

秋風のよそとはさためとも我かあのふ小夜のみえぬ君哉

百首哥奉りし時　左大臣

おもふ事またとも見ぬかならふかき世のあさらんよりを待る哉

題しらす　聖武天皇御製

しら風井はこえ乃家挖あらはれていまくるらりにはなれんかな

人をさそひてまつはまつらはれなれ

根蓴のくるしきよ思ひ妹にそ

後醍醐院御製

何よりも色をしらはや我おもひ秋の葉もたえぬなみたそめ哉

題しらす　読人しらす

うつろはゝ人のくらきみたくれはさく袖の涙か

法印善算

さためしてあはれところむこの夢もかさよ人の枕けり

祝部行盛

玉ひかりもてならひなき思ひそまて枕も露そまさる

平行氏

あまたあるうきも恋しき世をそてにかくれてかなしかりけり

素暹法師

恋しさは思ひみたれてなけきつつ我身なからも(?)よそにのみ経し

恋乃御うたの中に

後二條院御製

いかになる契りなりけんあふことをまたしらぬ夜の袖のなみたそ

延文二年百首哥奉りけるに寄(?)惜恋

等持院贈左大臣

ひとり寝の床は小嶋と井せきにてゆめちをさへやとまらさるらん

従二位業子

うらみつつかはる心のうきにさへなほこりすまの契りなりけり

式部卿恒明親王

恋ひしなはおなしけふりのゆくゑやと身をしらすともたのみける哉

善成法師

たのめしやいつはりならぬ契りそとおもひしかとも袖のつゆけき

前僧正頼賢

よそにのみみえし人をも恋そめてなけきのかすのまさるころかな

延文百首哥寄篠恋

等持院贈左大臣

かくしても人にしられぬしのふ山(?)しのふとしのふそてのなみたは

通書恋哉

入道贈一品親王尊円

いくたひかかよふ心をかきやりてなけきのかすをつもらせてまし

延文二年百首歌めされける時寄月恋

後光厳院御製

つれなさよ今はなかなか影とめてありあけ残る月もあらはん

恋しき夜

よみ人しらず

わすれかね月にみしまの面影もなれし契のなさけなき哉

法印宗算

浮世晴て二夜をまつ宵なからさりともあすはたのみなるへき

延文百首歌奉りける時寄月恋

前大納言為定

忘らるゝ身のうき事もわすられて思ふ人をまつのよなかに

高階宗顕

うらみしもやかてなほ結ひそふ思ひかな月のかけさへ見えぬ夜

黒戸のまへにて人々物いひわたりて又のひ侍りける

大貳三位

しらすやは月をまつらんあはれとも見えてそれともかはらぬ比

延文二年百首歌奉りける時寄雲恋

等持院贈左大臣

しられしなわか人しれぬ時雨ともうきをよそなる雲のかなしさ

殿上人の一品宮にまゐりてものいひける人の家の

前大納言公忠

まちわひて月さへかはる秋の夜に月ささのまつを頼みける

題しらす　　源邦言

かくしつゝあすかやまはたちかへりせけるとはたてつ色

喜覚法師

かひなしや世をのかれても年へても世の中こそうき身なりけれ
世のことはりひとつしけるか

大中臣能宣朝臣

うきよりもゆめともみえぬ命とはかりかりのよのなかに世をすてしひとの宮

題しらす

世中のあだなるひとにこゝろをて人あらそふ身のよそのみす

平光俊

等持院贈左大臣家にて人々三首歌よみ侍けり

宗玄法師

深山のうちもよそのよひもいはひのさとかすみわたりけれ

建保二年内裏百首歌

従二位家隆

としふりぬれよみの雲はれやらぬ世にこのみちもすたれはて

寄海恋

源兼氏朝臣

あふことはひとつのこしまのみちもなきよにわたりかたき

右兵衛督基氏

題しらす

なにはがたそのあはれてしらぬ人のやまほかにまよひゆく文

寿暁法師

いかにして君がとしつもる世の中にくるしきをかくの心なるらん

前中納言季雄

なかの世の清き名をこそおしみけれこれや恋のうきなかるらむ

宝治百首歌に　前大納言為世

あすもその桜もちらはやまはまたあらぬ命はかなからむ

題しらず　橘遠村

はかの世の桜のはなとおもへともなかりけり行末ならん

蓮生法師

のかれぬる我身はさてもうきよの中の人のこゝろの人を恨む

好阿法師

かきりなき心いそふかき恋のみちたかのもかへらぬ人の身のゆくへ

藤原基任

なかれ行世をわたりていつまてかはかなき世にもひとつかは

中務卿宗尊親王家百首歌に　平政村朝臣

いたつらにすきこしかたのおもひしおくにもしらぬ命なりけり

光俊朝臣よませ侍りける百首歌に　信実朝臣

いつまてか身のうきことをなけきつゝふることのみにかへるらむ

題しらず　権律師秀雅

恋しなはたれてかたらむ人そかしあはれといはむ人もなき世に

道勝法師

おもひねのゆめもうつゝもなき世にはいつまてあらむ命なるらむ

雅成親王

さのみこそ世をてつらしと恋しわれわかるゝ身を

源持義

恋しなはあはれなきみのいのちをもさてのみかゝる契なりけり

嘉元百首奉りし不会恋

民部卿為藤

いつとなくたのむ心のみなれはうきにつけてやおもひよるらん

題しらす

忘れしとおもひすてゝもさすかにはなをうらみのふかくなりけり

藤原範秀朝臣

見しはみなつれなきからにわすれとはおもひなからも忘れやはする

藤原元真

平守時朝臣女

いかにせんおもひよる人にあふ事はたえてひさしきいのちなりけり

源有宣朝臣

命のみ契りてこの世にさのみなからへてすむならぬおもひそや

祝部成光

ひとりやはうき身にそふる恋をしてわりなきものはいのちなりけり

源頼康

うきにのみなからへはてゝあはれとはおもはぬ人の袖のしつくよ

百首歌奉りし時

津守国量

ありはてぬ命をたのむ契とてわすれはてぬる宵の月

前右大臣

あふことをたのむ世なからへて秋まてもあらはいのちのかきりなりけり

題しらす　前大納言實教

鳴くもりのつきさかたくそなからふるわかれはさそとおもひしりつゝ

文保三年百首歌奉りけるに

うらみしを忘てしはしあはれけりおもひのほかのよるのさよはて

後山本前左大臣

嘉元百首歌に不會恋

二品法親王覚助

逢事のみなとはなきにつれなさのあらはにみえて命もさらに

題しらす　藤原長秀

逢事もあらはいかにとたのむ身のよるはこひしとしらせたきかな

百首歌奉りし時祈恋

前関白太閤

逢事をいのるかひなきかものやしろかけてもつらき人のこゝろよ

題しらす　太上天皇

いのりてもいのりかひなき身のうさにおもひあまりてうちなかれつゝ

人あはぬの日あまたかさなりて世のうきほとをおもひしるかな

中納言定頼

ちはやふる神のちかひもかひなくておもふおもひもうけぬなりけり

百首歌奉りし時祈恋

権中納言為重

なかなかやいのれは神もうらみけん思ひそめけんはしめなりけり

松のくもり宣旨百首歌に祈恋

前内大臣

誓ひてよこの我世まし祈りにかみさためいのるかひかな

題しらず

藤原清基

いのりにもあはてせうきて風やなさけもの命をのかれん

百首歌奉りし時祈恋

前関白太閤

いのりつゝ思ひしらなきを世あてぶれなさむとふかきまつき

題しらず

律円清

さりともとたのみそやらんいのりせしかみのちかひも世中にぞ頼む

権律師寛宗

ゆりとの祝なくれはためし祈りにも思ひしらすか我恋りかな

源和氏

そのまゝにいそきつゝむ祈りも雨とふりける人のうき涙

ひとかたにひとつおもひこそりかはらむわたつみのなかにてそ

逢待恋を

和泉式部

いやましにかゝる心をいかにせん人のこゝろを我よすかなむ

百首歌奉りし時祈恋

権中納言為重

祈りても我世にあまるなけきかなかつしらぬこそいのちのこさん

元亨三年七月亀山殿七百首歌に

為冬朝臣

手にとりし人のいのちもさためなき世をわたるとてそいかにかなしき
法眼経賢

題しらす
うらみしと人の心をおもへともさてもあまりにつれなかりけん

寄書恋といふ事を
素暹法師
いかにせんことの葉しもよ玉つさにかきつくしてもねにのみそなく

題しらす
前僧正慈海
ちきりしをいさきことまてはおもひしにみしをなほさへかなしきよさ

法印浄弁
いまはたゝおもひもたえてわれからのなかのちきりをそ人さへうらみられけれ
権律師隆覚

いはまそれいのちのほとをたのまれてたのめしものを契りなるらん

文永七年九月内裏三首歌に
前大納言為世
忘れしといひたのみしも契りもやあはぬなかには恋しかりけれ

郁芳門院根合に恋の心を人にかはりてよみ侍りける
六条右大臣
おもひやるこゝろもやすとおもへともさむるときなくなけかれにけりこのめやたち

新後拾遺和歌集巻第十三

恋歌三

約恋の心をよみ侍りける

宝篋院贈左大臣

いつはりはまたやなからんとおもふからまたれし夜はのかすそつもれる

延文六年三月十八日三首歌講せられし時契約恋といふことをよませ給うける

後光厳院御製

いつはりのある世としらぬ身なれはやさりともとのみなほたのむらん

貞和二年百首歌奉りけるに

後思院前関白左大臣

ゆふくれとおもひきこしめぬ人のかたみはかりにまちやわたらん

弘安百首歌に

前大納言為世

いつはりをたのむになれてひとしきはまたなかりけるこゝろなりけり

貞和二年百首歌めされける時

花園院御製

きのふまておもはぬ人もありけるをおもはぬ人の心のうちかな

延文六年三月二十首歌講せられし時約恋を

前内大臣 実

契りしをさこそとおもはぬなかにのみ心をかけてたのまるゝかな

恋の歌の中に

源頼春朝臣

いつはりのある世をしりてたのむとはおもひしなからなほまたれけり

文保三年百首奉りけるに

民部卿為藤

いはひけりいく松かえのはつ花(?)も千代をかけてや君かためしに
見しは(?)

従二位業子

らむ(?)あかぬ君かためしに(?)たちかへりいはふ千代のかすや(?)まさらん

大江冬時

はるかなる君か代(?)をなかくいのる(?)御代にあふそうれしき

法印覚雄

いはひをくむかし(?)に千代のかさなれは(?)いくよの葉のかはらさるらん

源和義朝臣

緑なる松のこすゑ(?)のかはらぬや万代(?)ちきるためしなるらん

平英時

君か代(?)の松にやちよもかはらしと(?)いはひそふる(?)千代のかすかな

従三位長衡

さのみ(?)いはふ(?)ためしは(?)かすもしられす(?)千代の数かな

後伏見院御製

あかぬ(?)君か(?)ためしにいはふ(?)春も(?)千世の(?)かすかな

従一位宣子

いはひをく(?)ためしはあまたの(?)ことに(?)千代の(?)松(?)のかすそ

延文百首奉りける時(?)寄(?)

後光厳院御製

さかゆく(?)ためしにかさね(?)てみよ(?)とかやなをも

かぞへしれは流れてよろこびのいくよかぎりなき千とせの春さかへむ

権大納言為遠

題しらす

いにしへのみつのはまゝつなにはかたよせてくる浪のたえぬそらかな

源氏頼

はるかなるみとせの月にまさるかなけふの雲井の秋の影かな

惟宗行冬

権大納言為遠家にて三首歌よみ侍りけるに

湖上眺望を

みなとえて舟ちかゝらし遠き波のかすみはてぬはゆきの白かり

祝部成光

題しらす

いにしへの千とせの松を祝ひてそよゝのみかけの秋をまつかな

宗仲法師

むかしより松の緑はかはらねとしけき木のしたにすむ人そ見る

津守国夏

かきつめし松の葉かたみ見る人をいつまてさとにしる人そなき

晴膳法師

すみよしの松のみとりもいくちよか年ふりぬらむ花の色もさらに

藤原信野朝臣

うつしうゑし松はいく代をかさねても涼しきかけはたえすそ有りける

津守国貴

いはひつゝきみを月日の影そへてなかき世の松のかけに見む

前大納言俊定

大炊御門右大臣

ゆくもとを旅ハ雲ゐにかへれ行雨となれはまたのむすふ露衣
おとみの人国と渡りてかへりこんとはひろのほと
もとをはなれからんて侍りし

遊命婦

人をまつかとはくその花ぬまてならなのめ月のかけに
寄浮歌恋にわしまたと

従三位邦政

みよしのゝ河浪よする月かけに雲ものこらぬ秋の
題しらす

源氏清

あはさりし恋津きよう名もとめぬ数に
恋乃ゆへに

藤原家遠

なみのをかへりくるしれは枕にとをかきこよ
あふ夜にもおぼゆるやみの我とみえしこの夜
初恋の心を

多々良義弘朝臣

そのつまを恋ふらんと思へやこの浦のかり
延文百首歌奉りける時寄関恋

法印浄弁

恋路はまたまよふ道ゝし小夜の枕を拾ゆく世
文保三年百首歌奉りし

前関白　左衆

思ふにはひとつまつなかくてあまた行もあらかり

前大納言為定

題しらす

内大臣

あふ秋をおもひしらぬも色我身のしらて見えぬことはりかなしさよ

寛正二年百首歌奉りしに

大納言師資

そのまゝにやそいのちもたえぬへしはかなきわかれのおもひなりけり

逢恋といふ事を

経誉法師

なかなかにあひみてのちそたのまれぬ花のちるをそよのうきにしる

百首歌中に逢恋

法印長舜

ちよもかはらぬかたき契のうへはしたゆく水のあさからぬ

あひみて後

延暦法親王

わかれにしそのあけほのはこころなくうきことのみそしたふ今の身

寄恋別恋

前大納言為家

おもひやるそのまゝ月のおもかけはなれさりけりせめてのこりの

急別恋といふ事を

権中納言為重

うれしさはかなしきものとなりにけり恋しさまさるあかぬわかれに

永徳元年六月十三日前右大将家にて講せられし時

左大臣

惜別恋

わかれにはいかにわかれむあけかたのそらめの末のたえぬへき

百首歌奉りし時別恋

藤原為尹朝臣

秋の夜のなかきもあかてわかれにしちきりのはてのつらさをそしる

貞和二年百首歌奉りけるに

等持院贈左大臣

名のみなりけりと思ひし秋の夜もなほさらなる秋人の心なるらん

題しらす

源詮信

世をすてゝまてとはれぬ秋八百の名残さへのこる也

後野宮前内大臣

うきは又もいさしらぬ月のかけさへ猶しのふらん都の行すゑ

永和元年八月十五夜三首歌講せられける次に

月前別恋を

太上天皇

清き名はひさしかるへきやかせてまかせて有明の月

百首歌奉りし時別恋

権中納言資教

うきまゝにさのみあかつきのあはれかなみはてぬ夢もあり明の月

相思別恋

源頼元

形見そといひしなこりのわかれちはそのころもつきぬ有明の月

月前別恋の心を

前大納言為氏

見しまゝのよはにあかすその契りもむなしき有明の月

恋の歌中に

源基時朝臣

いまさらやたのまむとおもひしその秋きぬるの秋の月影

建保二年内裏百首歌たてまつりけるに

正三位知家

あり明のわかれしよりもいつしかと秋をまちてそ月も袖の波

題しらず　前中納言基成

さくらちる花のちりかひくもるやまかせにしらぬ雪そふるさと

百首歌奉りし時　崇賢門院

なかめやるそらのかすみも春の日の山のはにほのかなるかな

詠郎成豊

たかさこの尾上のかねのおとすなりあかつきかけて霜やおくらむ

千五百番歌合歌に　後鳥羽院宮内卿

あふさかの関のしみつにかけみえていまやひくらむもち月のこま

くもゐまてたちのほるらしかすみさへはるのけしきのふかきやまかな

しらくもの立田の山のやまさくらちれはそかせのいろにみえける

世の中はあはれなりけりわすれ草

尊良親王

はるかなる花のいろかもみえぬまにちりぬるかせのうらみなりけり

百首歌の中に　後鳥羽院

ふるさとのにはのさくらのちるころはいくよの春をしたふなるらむ

光明峯寺入道前摂政左大臣

年ふれとつもりそまさるわかれちのあはれもしらぬ身をいかにせむ

そのかみのはなのにほひはかはらねと

ゆく春をしたふこころのふかきかな

花のちるゆふへのそらのかすみにもあはれはしるきはるのくれかな

貞永

はる物思ひをとはせ給ける
二條院御製
たとへはなをあさきゆめいのちとも□ひ
為忠朝臣家にて百首歌よませ侍りける恋
皇太后宮大夫俊成
いかにせむはかなきゆめのうきふしを
元良親王をも□やかしゆかれとのみ□てなる
あさましと津きまさりとゆ方をはまつのよに
ことふりて露とも人の恋り
寺院侍従
ゆふくれはしのむかしなさめるいろあはれ

後朝恋の心を
源季廣
あかつきをかきりにむすひしかねことはなきみの□さめ□さ□
従二位家隆
かきりあれはさくらのいろもうつろひて花のなかりもあはれさき
百首歌奉りし時
侍従為教
寄月文語の昔をさそへぬ津もはしむ月の影
文保百首歌に
法印定為
われはたゝ物のはかなのうつゝそゆめの津もを
人まつとめ

新後拾遺和歌集巻第十四

恋哥四

洞院摂政家百首哥に

西園寺入道前太政大臣

くりかへし猶みしまくらかはそれならぬ夢もありやとまとろまれつゝ

題しらす　読人しらす

ひとの我にかけてぬれきぬかわかしそめしよりあさへ恋かかりけり

元亨三年三月盡比醍醐流に三首哥講せられし

同時寄恋　為藤卿

流れとも猶すゑもいかならんこのかはせにたのむ誓ひを

寄雲恋　前大納言為定

ちきりしもこのよならぬをいまさらにかけてものちのよをたのみかねん

貞和二年百首哥に　後[illegible]寺前内大臣

わすれぬもわかれしのちのおもかけもいつしかさこそめくりあひけり

題しらす　よみ人しらす

ゆふへともおもひやまれぬやすらひのあはれまつけてなとまつらん

寄帆恋　津守国助

たのまれぬとまりも風にゆく舟のそらにかはりはてまし舟のゆくゑ

題しらす　よみ人しらす

うかれてもたのむもはかなきかすかねやたとへて船のすゑはしらなく

百首哥めされし時後恋

太上天皇

たとへはかくはかりあらましてちかへれやまと
わかれても思ふ心はかはらしなまたおほくらのゆきふ
りぬれはさてやのりのゆくさきをたのみてもや
いつかはまたとおもひおきてゆくすゑもかな

よみ人しらす

なからへてかへるこゝろはやゝこきえて思ふ人とあひ
かたらふにうらみのおもひあり

中納言朝忠

たのみこしかけのおくりてむかしなからのかみよりゆるさ
そのためも思ひきりて二十年あまりゆくへもしら

時家朝臣とはかりことをつけけれは

太上天皇

たのみこしおもひのまゝにいまはかくれなきよりけり
思ふやうにならぬとは思はさりき人のいのちなりけり

よみ人しらす

あらはれぬやまのはのさくらはいまはとの雲にそかくれなん
ゆめありけむ世は

前大納言為氏

よしの山はなのあるしはゆめもいまはなからんかくれな

従二位家子

はるかなるのちの世もやとおもふはなのうへの松山

爲家

津守國助

たのめりすゑのけつやまとゐ給ふ事てありし志人のあはれ

百首歌奉りし時戀歌

崇賢門院

あふとはいとはしくやまとりのほのつらかけかんかりもてそとそて

戀乃歌に

定顕法師

まてはさてゆくすゑ志らぬいのちかな何かりけるかりを何頼みけん

會不遇戀

大宰大貳重家

みりはたゝ年をかさねて流れ止まもゆくは海りめらふ

題志らす

大江宗秀

ながらへの春ばかりかなしみてわかあふさらいでそそ事

五百首歌合に

宜秋門院丹後

なかなかにこえてもまよふ逢坂の関のあなたや戀路なるらん

題志らす

權大納言宗宣

くるしさは百夜の数の志きやこ元かきかひ見るましを

寄関戀といへる事を

源頼之朝臣

かへるさも人の志るやと出て後の空のさはりなるらん

百首歌奉りし時會不遇戀

侍従為敦

せめてなほかなしきものはさらにもいまさらつらきのはなの緒

題志らす

前大納言為家

いまはやと頼むのいのちみえしかは秋も志らぬ人にこそ見て

題しらす　秀能法師

さやかなる月のひかりをまちかねておもひのほかなる身ならし道

藤原行能

しくれやらてこのあきさそふ稲の葉はに露そおきける

三善頼秀

あきかけて忘れぬ物を秋の人のあきぬるかみぬせ

寛治百首歌奉りける時　内宗橘忠

あはれなる身のよそにみえしのもりをまちかねて袖の露そひまなき

藤原隆親

題しらす

藤原光秀

さくらもとてのちもや我かよふははかりなし思ふらん

寛喜元年とりの年　平貞秀

ながきよゝあさくらやまのはるかなるあさかけの月のかけそさひしき

貞和二年百首歌奉りける

前中納言為忠

いつまてか我なからのあさくらのはなにむかふとも心もなし

題しらす　読人しらす

中川のあさくら山のよなよなかけてなつかしきあはれなる月

衣笠前内大臣

あらしふくやまのはなれは我かよふにひとりなく

権中納言実教　三首歌たてまつりける時

恋を　　　　津守国量

わかなはたえし橋のなかりしにいさゝふ浪にかけて恋つゝ

題しらす　　　　宗祐法師

よそにのみなるみかたの松かせに浪のかゝりてもおもふにしらぬ人をも

人めのみしけきかたのあはれにてあふかたしらぬ恋もせぬかな

参議雅経

みをさのみしけの桜井のわきかれぬ人のかけをまたぬよもなし

権中納言為量

思出よ野中のし水の草かくれわすれしほとのかけはみえすとも

前大納言宗明

むすひをくかたみの柳のけしきのみたのめしまゝにあらそふなる

前大納言為家

夕暮し井の清水のよそにてもそのかけのみそたちもとまらぬ

延文百首歌に寄枕恋

宝篋院贈左大臣

ちきりこの手枕のかたみにてかはらぬ夢のゆくゑをそしる

おもひくるまゝにかなしき百首歌中に寄衣恋

入道二品親王尊道

しのふの袖もかはれる色やちる夜もさそ恋しかるらん

寄法恋をよみ侍る

左兵衛督基氏

たのみつるひとのちきりはあさからてたのむもかけの枝のかけなき

題しらす　　宗覚法師

ちりてみれはなからひとつの契りしもかくもまきらはるゝ秋

大納言通具

ゆきもかくやとはかりしものを中のおもひにまかせても

延文百首哥に寄風恋　　宝篋院贈左大臣

わか袖にかよはてゆくか秋風はいかてかしらん契りけるかな

題しらす　　前大納言為定

そのまゝにもふかき契のあさからぬ行くすゑまつはさらに

貞和二年百首哥奉りける時　　後岡屋前関白左大臣

浅からぬ人の心をたのむとも我こそしらめやたのまさらん

永徳元年六月十三日内裏にて三十首哥講せられけるに寄絹恋といふ事を　　大宰権帥仲光

別れしをさはりそめける人めかれつれなきものとしりぬらん

會不逢恋　　祝部行親

むすひおきしかはらぬ契にしけれ世のすゑにみそ契りける

題しらす　　権律師玄恵

面影のわすれかたみもひさかたの月のあはれにまかせてそみる

文保百首哥に　　昭訓門院春日

なかなかにあひみてのちはうき世にもかはらぬ物とやしるらん

恋哥とて　大中臣定雅朝臣女

いまはてゝおもひしよりも月日さへうきになれ行心かはるらん

君後恋哉　後二條院御製

しらすそ人のおもひしらぬひの志のふさらりはやさきのさき

題しらず　今出川院近衛

たのめ世をなかなかにうらみありはけれはおもひけりふりにあはぬ秋

源氏経朝臣

めくりあふ月をや人のみよ哉涙のうちてみる秋のそらかな

伊周臣

うき涙ひとそ袖の月かくすらむそれとのみかとやさん

百首哥奉りし時　遇不逢恋

前関白左大臣

いつはりと契しそなかけもとゝかまつ月夜の秋

題しらず　源頼遠

長き夜にひとりふけそしのふらんかなしあり月

源親長朝臣

そのまゝにかよひし人のなくさめて秋のあはれの夜半の月

後二條院御製

わすられぬ身をなかめつゝ月もこのれひとつかなしの空に

嘉元百首哥奉りし時　正三位隆教

わすらるゝ身をなくさめてもみるよりもつれなき月の秋の夜半

題しらす

西園寺入道前太政大臣

まれとせしかひはかりのなれもおもかけのこる有明の月

三十首歌講せられける時寄鏡恋

左兵衛督資康

面かけのうつるを我もますかゝみ添ぬる影とならはやとそ

題しらす

法印守遍

つれなくてすくるつれなき面かけもみくるしく今の涙かな

前大納言為家

今さらにみえん姿のかけたにもうつるかゝみはたのもしやなれ

延文百首歌中寄鏡恋

摂政太政大臣

ほかにみし面影さへもうつるらむかゝみのうちにそれとしらなん

題しらす

読人しらす

月のみやうきにほかけてますかゝみ我袖にのみかけはとまりて

寶治百首歌奉りける時

前大納言為氏

鏡山みかけのうつるよそのかけもうつりきぬらん影も写りける哉

新後拾遺和歌集巻第十六

恋哥五

題しらす　　素性法師

忘れなん時志のへとそ浜千鳥ゆくゑもしらぬ我を神にいのらむ

藤原光俊朝臣

まよひ捨ていはゝ心のしるしありや花のつゆさへ
ゆきのよそめあまた男のまてとりてかへりみて
さもあらはいつ思ふへきかひなしとひとはれぬなる

馬内侍

忘るゝはちる雲の行てきえなんとまちわひて
木とこのかれしはなりける女てかへりてなる

讀人しらす

いまはとて人をもとも猶飛雲[illegible]
恋の御哥の中に　　太上天皇
世のうかりしをもなき身にそあれはしらぬとおもひてもわすれん
嘉元百首哥奉りける時恋歌
　　　　　万秋門院
頼もしきはあるかひもなくなる身とたのむものかなさ
題しらす　　源頼之朝臣
たのめてやまた人の心のうさをおもひしれとなれてみまん
寄書恋　　権大納言公[illegible]
玉章のそれさへなき身にそあらん色をかはすきさ

嘉元百首歌奉りし時

法印定為

かゝみてもよのことはりにおもひなしてもこゝろはなをもすみかたき世かな

百首歌めされし時

恋歌の中に

太上天皇

あはれともいまはのちのたのみたにおもひとたえておもひわすれは

とふひとのあはれとおもはゝ

嘉元百首歌奉りし時

わすれすとちきりしはかりうつりゆくそのことのはのなほ

百首歌奉りし時

源義詮朝臣

忘草むすひてもみしこゝろよりなをはなれゆく中のうらみか

左兵衛督直康

恨みとてたのみし人のつれなさもなほあはれとや思はれぬらむ

延文二年百首歌奉りし時　寄絵恋

一品親王覚誉

わかれにし人のおもかけうつしをくそのかたみこそかなしかりけれ

寄草恋

崇光院御製

かけてたに思ひもよらぬ袖のうへにつゆそこほるゝ

前中納言基房

このまゝにわかれぬとてもかくはかりつらき心のほとを見えける

題しらす　　源頼資

おはりせきしつ西かたにことに心すゝむることも悟

平貞秀

そむはかりたのみ来しとも千すゝのかすにかけて弥陀の名

弘安元年百首哥に

後西園寺入道前太政大臣

なれゆくおもひの色はなき涙にてうつろふみると秋風そ吹

恋哥に

権大納言教嗣

しられては山にけのまくら千すゝのむなしきはたのまれ

藤原成宗

積りたるあはてもきゝて涙にしむとはすてゝそ忘れせん

寄草根恋　　従三位忠重

ますけのしけみはわけも見えす涙にそ見はてぬ物をまは

題しらす　　参議雅宣

わかれにしあきのたもとのかゝる露を尋ねしやなくなみた

乗空上人

ことの葉の色はわれはいま涙そむすふわかれなきまの袖

藤原長継

おきのをのむさしのくさの中にこゝろみをしなへて風そふく

絶恨恋　　頼阿法師

ゆきのをのむさしのはらのわかれてはいくたひ末をたのみ見ん

題しらす　　紀俊光

深き夜の[illegible]や[illegible]夜[illegible]みえ[illegible]をとめの神代

貞和百首歌に　　前中納言為明

うき身のこる我が心[illegible]心にうちそへて[illegible]や[illegible]わかれ

弘安百首歌に　　前大納言為氏

あはれいかに[illegible]のこれる[illegible]やいつまで[illegible]らん

題しらず

わが方をそむく[illegible]かげとなりゆく[illegible]ひとのつき[illegible]ぞ　　菅原秀長

[illegible]ゆくみちもひとつ[illegible]月日[illegible]て[illegible]

身の程は[illegible]しるべ[illegible]もかな[illegible]やすからん　　権中納言為重

宝治百首歌の中に　　大納言為家

これをみる[illegible]につけても[illegible]をとこそ[illegible]

百首歌奉りし時根[illegible]　　前関白左大臣

あはれ[illegible]わが心[illegible]かへりて[illegible]のおもひ[illegible]

恋の歌の中に　　津守国久

[illegible]こころなのひとつ[illegible]おもひ[illegible]

貞和二年百首歌に　　入道一品親王尊円

[illegible]のこる[illegible]ひとつ[illegible]のちの[illegible]

嘉元百首歌の中に根[illegible]　　民部卿為教

ゆくしすゑのかゝみとそみる君かよのこゝろのおくもおもへは
慈照寺中山　高倉院御製
つく〱とたちにしかたをおもひおこせはをしきことのみ
貞和二年百首歌めされけるついてに
花園院御製
あとをすゝかにおもひしるみちのまことをいまそえぬへき
百首歌奉りし時根忌
前大納言善成
いまはらもいつかしらましみちのまことをさとるみさらん
根本忌といふ事を
妙法三宝院入道前内大臣

見るまさに我身のなれる心をもちるらん
人をさへいかにせむとおもふ我身のよをしれ
伏見院御製
ゆくしとてあとをしるみちのこゝろにしらるらん
源義詮朝臣

新後拾遺和歌集巻第十六

雑歌上

題しらす　　後鳥羽院御製

やまとことのはやわか代にかきつめてむかしにかへるみちそうれしき

百首歌めされしついてに述懐　　太上天皇

をさまれるあとをそしたふ道あれとおもふにもや代々のきこえやたのむ

題しらす　　円融院御製

ひとりさす事はかたのこゝろして末けるひとの神やうけつるさかえ

天の庭まてうかりてそのほりぬる時　　入道親王尊覚

おもはすの山すゝめをそめくりあふ月日ありやと

題しらす　　従三位為子

なからへて憂き世のそこにみるの心またをのときけるかな我

いかにせん我ひとり道のはかりにて世をいとふまてたのむ我身を　　法印儀運

うきをみるみにもまたなきひとの心さしの三輪の杉村　　津守国夏

やまのはてあかのむすひて人をしる行代々のかけ　　法印俊憲

山家にて　　津守国量

[illegible]

うちわたり宇佐のくれはたや海みゆる松風ぞふく
津守国冬
ゆふしほの松のかげにて見わたせはいよ〳〵くもる入江の渚
永福門院内侍
延文百首奉りける時
あさ霧の磯のなみまにけりもあへぬ松さへかくれなくさりけり
摂政太政大臣
永仁六年十月亀山院仙洞五十番歌合遠浦晩望
こゝろとは残るなみまにくれゆけり
津守国冬
舟人のかたほはゆくさとみえぬみなとの春風の浦

宝治百首奉りける時海晩望
冷泉前太政大臣
わかのうらやゆふのしほかぜふきにけりかへるなみぢにのこるかげ
百首御歌の中に
太上天皇
ゆふ日かげひかりさすかたの浦かぜにしほけふかくもなりにける
百首歌奉りし時
左大臣
和歌の浦のゆふなみせまくよせくれば
権中納言為重
松のはにしほひさえゆく浦風の松風ぞふく
磯浪といふことを
前参議

たからせのはやくいそけておろす川ふね[illegible]

寶治百首歌に 礒叢

従三位為継

しほ風は河なみのいくへ[illegible]

題しらす

源義春

しかみ[illegible]の[illegible]

貞和二年百首歌に

等持院贈左大臣

[illegible]やとりし[illegible]

題しらす

僧正定伴

[illegible]の[illegible]橋[illegible]

橘遠村

[illegible]

しらぬ人しらす

[illegible]

秋の百首歌奉りける時 小橋

津守国冬

あさ[illegible]

雑歌の中に

源頼之朝臣

[illegible]

延文百首歌の時 暁鶏

寶篋院贈左大臣

ひとかたにおもひとけにしさとならはやまてそすむへき月の影哉

松下月　西園寺前内大臣女

松かねにもりくる月をまちえてもおもひしもとやかはるらん

延文百首に　権大納言時光

いまもなほ絶にしへにかへりける月やとりのおほき宿かな

摂政太政大臣

身の老よいかなれはかくも年ふるのよにはのこりけむ暁もなか

郊内百首中に　光厳院御製

ふるさとはゆめちよりこそかよふらめおもかけにのみみえてかへるらん

百首歌奉りし時暁

入道二品親王尊道

なか夜のねさめはなかくなりにけりねられぬまゝにきく鐘のおと

暁更鐘といふ事を　内大臣

きゝなれし暁ことのかねのおともあさましのねさめとやきく

題しらす　浄阿上人

老かたのねさめはふかき暁にゆめちもかゝるちきりなりけん

前大僧正頼仲

冬すら夜ひとつふすまはさむけれとねさめの床の涙やは

源頼春朝臣

長き夜のこゝろねさめのまくらにてきくもかなしきやまかつ

在原業平朝臣

それとても思ふはかなき世の中にこれもまた夢のさめぬなりけり

入道二品親王よませ侍し五十首哥に

前中納言定家

人はみなおやのあとにはなれぬらむ我もむかしのかすならて

述懐哥とて

前大納言為家

くるゝまてあはれふかきすみかなれは昔一つそさへなき

平政村朝臣

のかれえぬうき世はかくておもひしれ上のそらなき

弘安百首哥奉りける時

前大納言為氏

その山の花もみち木となりぬ梅さへそひくかたそなき

題しらす

平時頼

祈ることもむかしにかはらすよむかしのまゝにおもひけれ

前参議教定

とりかへすみちもあらはと思ふにも下にそ恋せん

為道朝臣

世の中はうき身をかへてみちのくのつゆのまもなき

婧子内親王

うき事のかゝる世にこそかはらすはいつくに身をかくさせん

信實朝臣

あはれよのうきにつけても心をそ

題しらす

一品法親王寛尊

そのみちにたちかへりなはうきことのつらさにあはむ

りくかへさはもかへさてしのふやまたえぬるいくわかれの波

述懐哥中に　源義将朝臣

人のよのうきとみえしのやわかのうへかりえのりゆきさあめあまの道

よみ人しらす

みなかみにまさりてきくもわかのうへにかりそめにこゝろゆるさむ

とらへさりもゆくかたさへにけれはたのむわかのうらを

後鳥羽院の御時和歌所に催さるへき由おほせられ

けれは　鴨長明

しらすいまさらわかのうらにすむやとせむとあまのすみか

題しらす　よみ人しらす

ゆくとゆくかれはひとつわかのうらにすまゝしやあまのかよひ船

夏哥めしけるついてに　順徳院御製

五月やみさいりかぬ清まけの浪よりかつはるゝの弥

題しらす　従二位家隆

いそのかみふるき流れはいまもあらたにきよきわかの浦波

前大納言為家

いまはたゝ世をもへたてゝうちわたすもろこしの家

文保百首哥に　前権僧正[illegible]雅

昔人の跡をみかゝへやまきさとにひらくもすみかゝ

題しらす　冬雲法師

かはやくみよりやよかはりてなをすゑの世のわかのうらまし

津守国夏

世をのかれやまはらしほとあめのかゝる小川もうへきん

法印慶運

かくれてもなほいつかやとりたひとはしるまじこのみそかな

弘長元年百首歌奉りける時山家

常盤井入道前太政大臣

あらはれくわれもむすふしのはやまきひとにしられぬかくれかりけむ
おもひいれは

法眼円忠

松風を友ときゝてすむさとはさはかりうき世のわすれぬこのやまか

元可法師

風はさとふきみたれそふやまのうきくもかへる/とまらぬそなき

題しらす

読人しらす

山ふかくすみなれしみちやすらはゝとひくる人のなきそうれしき

紹弁上人

それまてはいとひしものをやまさとにとはるゝ人のたよりかなしむ

正三位通藤女

のとかにはとりもなかぬやまのおくにまたなれぬてや雲風そふく

梅殿太政大臣

山家嵐を

あはれをもむすふ嵐のたえまなくけりのやまのまつかせ

百首歌奉りし時山家

源義将朝臣

さひしさはなれくるまゝにやまさとをわかすみかとやおもひさためん

題しらず　　　頓阿法師

さのみやはきえてのこれるふもとさへまたなきのかり

祝部成宗

しづかなるやまさとのあかつきにねさめて人のこゝろをしらん

藤原長信

ゆふしくれそのゝちやまさとは松のあらしもともにさひしき

よみ人しらず

今さらにおもひしらるゝ山里はかれゆくまゝにはそひしかりける

惟宗貞俊朝臣

いかにせむいとふ心のあるにまかせてなれし山さとのすまゐ

権中納言資教

何かまたのきたなかいふさとゝふかくなるへの秋やそのまゝ

源頼之朝臣

さひしさはすみなれてこそみやまさとまたとはぬれぬ松風

権大僧都経賢

山さとはおもひすてにし山さとにいとふへきよのおもかけもなし

祝部成経

よそにのみきゝしやまさとはひとりすむやとはともなみてもまつらん

源頼康

とはれぬをうしとはおもはしやまさとは人めかれにし家のすまゐ

権大僧都隆縁

すみなれて浮世となりしかへるとも山のうちひやまさらん

藤原康行

あれわたるやとやわかれんやまさともゆふくれにてきこえそすい

蓮道法師

うき世よりみつゝかへてこそあれすてはいよ〳〵みの花のをき

源顕則

とふ人もすむかひもなき山の戌寺より水もさえ紫の庵かな

かきなひのみねのみえ行ゆふあまにたれかはとみしまたまきさへて

てらあつ　　前大僧正行尊

緑はやはるにはや鳴くこゑにもみしのひのかけのほの水かへとまさるを

荒まし　　藤原輔清朝臣

わか涙はありしひかりをさしかへみなけひのみかいそとみけり

藤原行輔朝臣

この里はむかしはひのもとの都にて山の嵐は末もたえ

前大僧正慈勝人こまよ世のつゆなかの御前なり

田家　　法印慶運

そのかすさとたのいさらみかはさへよもよそにおもひをなく

緑露吹ふるさとの秋にはみゆる空をかなかりにけり

静仁法親王

述懐のいはかりなかつ　　覚増法親王

よみかへしは憂きあまの海をたにをつくへしやまをかけ

前大納言實教

いまさらにたゝかりもすとこの後ちは残りけん雅えたえかき

雑哥

おもひいれしゆきしもふかき山里はとはるゝ宿のそとさへもなし

宗鏡禅師

思出の昔はいかにしのぶらんあはれとや誰かまたきかん

権中納言経定女

あらく物うらみかほなる世の中をたれとのこさん人のよはひも

前権僧正圓伊

世にふるはうきてうき身のたかきをもはなれすみのこゝろかな

菅原為春

きのふたにありしにかはる世の中のはかなさをしりて来し

昌義法師

法印兼慶

はなれてや思ひやたれたる世をすてゝ我身の程をきかけん

性教法師

かくれかのおくもなくてはむかしのよにもすむへき

平重基

かはらぬ月のひかりはみちのかけたなひくとも

讀人しらす

たのむもそれてはかなき世をいとふ心の世をすてむ

源孝行

なからへてうき世にすてし身をのかれてもまた世をすてゝなりぬ

道好法師

はの世をうけるみちのたえなき身をすてゝむかしのことを思ひ

嘉元百首歌に述懐　権中納言公雄

世の中にあはれはかなくすまゐしてそてにかゝれる身のなかに
のこるらん

新後拾遺和歌集巻第十七

雑歌下

世をのかれて横川にすみ侍りける比よめる　藤原高光

みやこをはなれたるやま雲にいるなかきすみそめの袖

をみそめし袖よりきよの世をのかれてもいのちはかはる涙かな
気しる涙　とふ人に

述懐の歌とて　頓阿法師

身をつみてひとのうき思ひをしらぬかなすみそめのいろ

中務卿宗尊親王

いとひてものかれやと思ふかなこの世はまよふ道

貞和二年百首歌に

後岡屋前関白左大臣

我のみや[illegible]友とはたのまて月やみるらん

正中二年百首歌めされけるついてに

後醍醐院御製

とのへもる人の[illegible]秋の夜の月

[illegible]二首よみ[illegible]

前大僧正道基

[illegible]

従三位為理

うれしさも[illegible]月[illegible]ん

永和二年八月十五夜三首歌講せられし時

摂政太政大臣

[illegible]秋の月[illegible]

[illegible]月のかけ

源光行

[illegible]月の[illegible]ん

陽子内親王

[illegible]月[illegible]

建保三年内裏十五首歌合に

大納言通具

ゆきとみるさゝらの秋の月霜にてさいさえて渡るかりかね

題しらす　法印延全

見わたせはひかりなきさとふかきそらのさきの夜の月をみるかな

貞和百首哥に　前大納言公蔭

秋の月たゝいくちゝかけて雨しくれよりゝ代々のあはれを

題しらす　夢窓国師

世のうきをそのまゝなかめあかすよの月にもやさはしらめん

源頼貞

住よしの松のひゝきにさえぬ秋の月いつよりかゝるかけのかきりを

閑居月を　中園入道前太政大臣

なか月はまたるゝなかめあかしても人の心みしかきは

入道二品親王尊道家百首哥に　前中納言定家

雨はらふいはふねせきなかるゝそらにかゝるあまのかはなみ

題しらす　源守国

いつのよにたえてはむかし秋の月日数もさすかかけのかきりの空

平通基

いかにして世のうきまてもなかりけるよのあはれにくもりてをなかめん

中務法師

身のなかはなかりけるものをそらにこそかゝるくもにもてるなき月

藤原為量朝臣

とてやそはかたるまれならぬ残りて世のとふかいかゝるらんみむ

文保百首哥の中　　　前大納言実教

ゆりとりとゆくも應のひあきにしはせ乗を残し侍らぬ

題しらす　　　權僧正良憲

うきせ我身にいあ路をゆくすゑのかけにいそきをやつらむ

法印昌算

かゝりてはたえぬへといふ契りぬる君のあはましい末をたのまし

法印宗信

はまさ世をかゝむるとそあらうかれゆくを思ひ知やらまし

藤原高範

ひとをたにおもひもたえはのこるいのちもつらきかきりなる物を

前權僧正宗助

さりともとたのむさめきゝつゆくすゑをたのむかたにも契りおくらむ

三善為連

いまそそのこれいそのみかきの世にもあとをのこさまし

よみ人しらす

只ふくれしやなけれんあれてたのめる世をなけかせは

法眼運承

いかにせは我はまれもとおもへさためぬはかなさのいのちのみかは

弘安元年百首哥奉りける時

前大納言為世

あはれこのわかはりてはかなき世のならひもさらにかはりけり

題しらず　法印有雅

あら海の海にはなかれぬ物ゆへにかゝるうきめをみるそかなしき

妙藤法師

そむきても猶うき世はかなしきにいかに入らむ山はいかゝすむへき

昭覚法し

いとふへきうしとてまた世の中にすみはつるこそさめぬ夢なれ

宗光法師

おもひはひ世のうきとおもはしにいつとひとそこんけれ

雑哥とて　夢窓国師

わすれては世をとてもかく思ふものをはなとうらみするかな

源氏直

うきものはおもひたえてもすむ世にはなほうきことのこれ

権大僧都覚家

たちかへりてもうきかけはすむかひもやなきものを

題しらず　よみ人しらず

思ふことはなさてうき世のならひとて生残命をはり

たのしとそいとひもそいかにうき世の中かなしみのけん

禅要法師

うきはすてぬかなしさの世のならはせよそをすみそめ

道雄法師

なかきよとおもひしはかなくて月はにうき

大宰大貳高遠

おく山に浅茅か中にわけいれはありあけの月そ道

わすれ行人に心のうつろへはおもひしらるゝ

小町

何事も浅ましき世をおもひすてゝいまはかく

前大納言為家

さてもなほうきはかゝらぬ世の中にのかれえぬ

よみ人志らす

嘉元百首歌に述懐

うきなからおもひしらすも身の程をいつかは

前中納言雅孝

永徳二年譲國の宣命に摂政のことかゝれ侍りて

しき島の道をまもりのかみしあれは

年六十三にて位をおりて

摂政太政大臣

いにしへの跡をたつねて我もまたむかしにかへる

百首歌奉りし時述懐

権中納言為重

春日山の松のみとりに

二条院讃岐

いはゝそのかけにいくよのゆくすゑを

延文二年百首歌奉りける時

等持院贈左大臣

我ことはかりよりはかりもなかき世にたかくそたてしたかひけるかな

貞和百首の歌めされし時よませ給うて

光厳院御製

十とせあまり世をたすくへき名ハふりて民をもすくはぬ身そ[illegible]

なき法師やさしひとつひ給ひける春の芽をも

我ことしかて名のかとをとりつゝりなかりしかへそ

思て給ける

左兵衛督直義

世のなかやせてはのきを思ひあつものちゝりともかなや

世をのかれたるよりゆりたかふへのかへいひを

くりける

西行法師

世のかたちをしてぬともひとへ思ひ志らぬ寛へいかなる

定然法師

題しらす

世のかたちかはをきてをもかけて志とおもひしかと世をのかれても

安のにいはゆるへておもひまかせむへきとなふる

権大僧都経深

さらぬ世にすてゝはたれ志のふる世をいかにまきれのもちかたらん

権僧正栄守

せめて世をかけてかまきしあやのまれに帰るむすめ葉を

西園寺前内大臣女

ゆめりもかのひとりをもてそれにきのみちはけ

源高秀

清輔朝臣

うき身とはおもはれなからわかみをもあはれにいとひいとはれ

かなしきは世のうきことをしられしは身のうきほとをしる人そはかなき

橘重吉

なにとなく我ゆくすゑもおもはれて世をいとふへき身のみちもなし

源光正

そなたのみかはなる世のよそにのみなれてそわひつゝやふ

三善資連

我とてもあはぬ人ゆゑ恋の身はつれなき事のありしよりなほ

僧正永縁

しらぬ身とさのみあらはれてたかの心もかはりてなるそはかなき

権少僧都運円

みな人はおもひすてゝしわか世はむかしにもかへりけるかな

光厳院御製

おもひやる心はつきぬわか身をそ世にすみなれてなほおもふかな

前僧正尊玄

われはたゝおもひのほかのつれなさにおもひすてゝもすむ心かな

法眼宗済

おもひねの夢のうちなるおもかけもさめてのちこそなほまされけれ

前大僧正桓恵

ほかにまたむかしのあとの世のうきことはなけれともなほ

瑞子内親王家宰相

弘安百首歌に

前大納言為氏

うつろふ月は桂の程長くも莫ともおもひあはせ
ふ条摂政のおもひ侍るまゝあはす

右大納言忠良

あきはみてもこゝろ我おもふけのやさしきに世の中は今世
をしのはす

貫之

さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまてあはれなりける
世の人は我をもなきと思ふらん

後京極摂政前太政大臣

よりやまの桜の花のちりかたにちとせもおもふかは
をとめの袖にてたはふれし春の日も雲
すゝむ乃かりにしたるやまてつらいかゝ

良暹法師

この世をは思ひなれぬとうつるものを夢にはかゝりしとそなれはいさ此
西園寺乃ふるき代をしのひて

入道前太政大臣

山桜ちりかたの世の春とさへかはらぬ花の色のなかめむとあきの下紐
前中納言定家母のおもひに侍ける春のくれに後
京極摂政のもとよりかなしきことのかきこえ
さへけふかきりのわかれなりけり

前中納言定家

とふ

わか君の我をもわすれて春の日もてのまゝにみえけれは
前摂政家にてあるとしのよみてそ侍る三月つこもり

わか庵に松うへて侍りける時よみつけける

権中納言資忠

植しをく松の千とせのすゑまても我世をつくるかけそ久しき

題しらす

一遍上人

いにしへのいつかの津のわたし舟も我世をわたる[illegible]

高弁上人

あさからぬちきりをむすふ[illegible]

かねて[illegible]まいりて[illegible]

法[illegible]

藤原光俊朝臣

[illegible]

信実朝臣

無義の所は[illegible]世をはなれ[illegible]

後二条院[illegible]

[illegible]

瑞子内親王

いまは世にわかれしことは[illegible]

たのめこし世のかきりは[illegible]

藤原仲文

なかれてもちきりしことはわすれ[illegible]

題しらす

よみ人しらす

うてなのうへの[illegible]

祖父国助か卅三廻の仏事[illegible]文国[illegible]

こと思ふらく

津守国夏

たちかへり神代のまことを今も世にあらはすとこそ思ひやるかな

延文百首歌奉りし時

前大納言為氏

いにしへの法のはじめのことの葉にむすぶ思ひを声に聞くかな

よろづ代をかけてたのまん鷲の山ふかき言葉の色は見えけん

まよひてはおもきことの葉をたのむなりける

源頼

世の中はたゞかくてこそありけれと思ひしるらん法のためしに

花園左大臣家小大進

いかにして思ひもそめしあさからぬ法の道にもひかれけるかな

権大納言長家

草の葉に置ける露をもみることにおもひしらるゝ世のはかなさ

源仲綱

頼まるゝ心のうちにやどりけるあさかの沼の水のしらなみ

又法を聴てのち前栽の花を見て

藻壁門院少将

さかりなる花をもさそふ法の道にさそはれてこそ色もまさらめ

藻原侍従が母が世をのがれて後につかはしける

周防内侍

霧晴れぬ心の神の恵みにてやがて思ひを晴らしけるかな

前大納言為定十三廻に一品経すゝめ侍しついでに

懐旧述

雄宗法師

かゝる世はなれもやまれかしおほかたに[illegible]
民の[illegible]一かたよりの[illegible]にたなひく代

惟宗光吉朝臣

わかれにしのちやるかたもなくてそれとはいはて人のむかし[illegible]

後深草院崩御と相聞て七月十六日

入[illegible]世をなかるへき世[illegible]

伏見院御製

くるしみは世のつまりの[illegible]とおもふ[illegible]
母の[illegible]りてみたらし[illegible]

法印玄恵

わかれ行[illegible]の[illegible]はいかなるをかへすらむ

六帝のこゝに

託何上人

法のみちゆかみちを[illegible]やひとつのみちをたとりて

二品法親王守覚

はかなしやいつかたの[illegible]のうきよに[illegible]

如空上人

おもふかたのいつの[illegible]のあらし[illegible]

後[illegible]関白か[illegible]りて[illegible]

時は[illegible]日野山庄[illegible]

高階宗成朝臣

おくやまの[illegible]

なにひとのくしろかよふらん

前大納言忠良

もしほ草のこしおくともかひなきはなにしおひける

題しらず

土御門院御製

春の色は枝の葉のなかりけりたゞうき世をと雨ふるさと

すれなる

新後拾遺和歌集巻第十八

釈教歌

花厳経の高山頂説の心を

皇太后宮大夫俊成

朝日さす峰の雪まにちるはなもまづてらすの人ぞしるらん

中務卿宗尊親王

いのちすら春はまちえしとおもひきやさりともまちし我まよひかな

方便品唯有一乗法無二亦無三の心を

入道贈一品親王尊圓

春ごとにさく花とてもおなじくまよふ心のくもりはれけり

桜花さくとみえてもかはらぬは

源空上人

むまれてはまつおもひいてんふるさとにちきりしとものふかきまことを

法華経序品以是知今佛欲説法華経

後鳥羽院御製

のりの花いまそひらくるさかえたるよにとりひらかん

妙音品　寂然法師

くもりなき月のひかりにさそはれてやまのはをさへ

教主もとて月のひかりをかくしつる

浅香法師母

おなしそらの月をめくりていかのかりもとしとそさけ

寶塔品　法眼源兼

世尊の在世のみきりにあらはれてひかりをわかおなしけ

詠人しらす

いまそしる仏のひかりに新たなる玉のはちすの明月

梵網経盧舎那仏説菩薩心地

慶政上人

ひとつやまのいちはなれたる海のきはにすむかな

化城喩品の心を　前大僧正頼什

うれしさのみちをなほいそくるまよひをおもひそむるさきの實

詠人しらす

おなしくはいとさもりそむるにちかひてゆきをまたなみたけん

唯識論を　津守国夏

いたつらに雲のみちをや世にすみて心のうちの月をみるらむ

題しらす　　覚深法師

見ぬ人の心の月は照らすなむのちの世のやみのうちにそ

心経の不増不減を　　頓阿法師

かはらしなかきりありける月影もさえぬ心のあかしあかしても

釈教の心を　　夢窓国師

見られたる我と出てみよ志つ月のてらさぬかたは

舎利講　　後京極摂政前太政大臣

ゆくへてみし心の月をかくしてもなほ我やまに照らしてさん

観普賢経の深義を

色もなき世の中に雲はなくてむかしのままの月はみえけり　　信生法師

想観西方を　　寂蓮上人

西の空ゆく月をしたひてやわれもいさよふ心のうちはかなしき

華厳経の心をよみ侍りける　　権律師幸円

うちなしなかなかひとつ心はかはらねとやまの月をてらしてみ

百日の入堂のあひた比叡山不動堂にて　　入道二品親王尊道

侍りける

あらましをかくる心のこれならてなほやまの志つくるけりとも

題しらす　　前大僧正道玄

ねはまことにあふむしろやさはりのさかなのちさん哉

願蓮法師

にこりある水にも月は宿りけりいかなるものか心なりけり

賢琳上人

不変世のひとつ心はかはらねどそれぞれひとなおもひかりぞ

身をしる人にしらに

人なきふのりなきをもつとめもるのうやかにころるもん

観経釈文大衆遊此方発遣彼国来迎

前大納言為家

あらはにあるをむかへて入りしき西の岸よりかはらと海へん

嘱累不令以付属等乃心を思ふより接てもよう待

前大納言基良

あるへき義をとくのりいかさまにてたちそみもなる

涌出品文如蓮華在水

法眼源承

まれとよのみちにいはぬ身にそめぬはちすの花のこゝろをそしる

十疏させのみぞにまてあ

寂然法師

さとはちゆきむとひとちきけとも月のさそひにおもひける家へかへるさはね

嘱累品令一切衆生普得聞知

入道親王尊圓

あなへのゆく此世の身をもさそはれてひけはかへらぬのりのみち

前大納言為定十三年忌に一品経すゝめ侍しに
五百弟子品の心を

権中納言為重

受たもつ衣のうらのたからにはつゝまれし玉とみえもしぬらし

題しらす

重阿上人

雲霧とみえしもはれて本来の月は空にすむとこそしれ

涅槃経の心をよみて

赤染衛門

いまはとて薪つきにし夜半よりも残るけふりの跡そかなしき

題しらす

船月法師

法のみち入ぬる門はいかなれとつゐには極のさとりとそきく

此身何足厭一聚虚空塵

花園院御製

いとをしと惜むもうとし身かりそめの浮世にやとる身とはしらすて

新後拾遺和歌集巻第十九

神祇哥

弘長百首哥たてまつりける時神祇

後九条前内大臣

世なためとたのむ心は絶えせねとやはらくる神のちかひはいつもかはらし

貞和百首哥に

等持院贈左大臣

身をいのる人よりさきにかねてこそ神もなさけをそへてまもらめ

石清水社の哥合に

源家長朝臣

やはた山神やさらにもまもるらむそのみやしろをさかゆくみちに絶えせし

百首哥たてまつりける時

後光明照院太政大臣

かきくらす雪ふる山のみそきしてきみか世をもまもる神垣

花を

中臣祐朝

清色も神ともたのむみちならはいまもむかしのひかりやはそふ

後西園寺入道前太政大臣

ひとつ世に二たひすまぬ流とやあふかさらなむしるしみせけり

建暦二年十二月詠哥二十首哥

前中納言定家

ゆふたすきかけてそたのむ神もさそあはれとおもへ世をはかさらし

文永二年二月二十日よりはしめて内裏にて

えらはれける二十首哥の中に

中務卿宗尊親王

神もさこそあはれとはみめ和歌の浦のあとをあふくる人のことの葉

社頭述懐を　信実朝臣

むかしの跡たえす伝はる言の葉は光そへてよ玉津嶋姫

新玉津嶋社哥合有ける時神祇　前大僧正光済

玉津嶋たのむ心のかはらすはこの葉の末もなをや見えなん

題しらす　荒木田経世

いにしへの世々のことはをかきつめて世にもちらせる玉の光か

百首哥奉りし時神祇　左大臣

なをもかく我みちまもれいつかたの神よりさきの世々の

題しらす　恒助法親王

さのみなほにこりやそへんけかれぬの身をすつるとも神のちかひに

源顕氏朝臣

うき事は神にまかせよ石清水すめる心の代々もかはらぬ

荒木田成繁

流れそふ家をもとえぬことはりをさすかに家と神やみるらん

梅宮の立春の日よめる　権少僧都慶有

ゆくすゑはまたなにゝむかへこそそれも世のさかえん

題しらす　賀茂脩久

雲井まで神世の末もはるかなる松にかけてもしるやとふ月影

嘉元百首歌奉りける時

正三位隆教

忘れずよみたらし川のさゝ浪にかけてうけひし神のちかひを

法眼玄全

神祇の哥とて

かきりなきやとりをかみのちかひにて神代の松の色もかはらす

津守国冬

神かせのふかきめくみをたのむかなかしこきみよのすゑのゆくすゑ

題しらず

法眼禅慶

くもりなきやひとつの松の神かきにあふきてもなほちとせとそみる

度會朝棟

みなかみとよむ川のながれのすゑまでも神のめくみのふかきをそしる

津守国平

松かせの世々に絶せぬ松のはのかけてもたのむ神のちかひを

百首歌奉りし時神祇

権中納言為重

河やしろしのにをりはへほすころも神もさそみむたちかへり

津守国量

ちはやふる神のみ前のさかきはにかけてそたのむ神のめくみを

題しらず

藤原敏行朝臣

すみよしの松のこかけにたちよりてあふけはたかきかみのめくみの

能清朝臣

新後拾遺和歌集巻第二十

慶賀歌

題しらす　前大納言為氏

わかうらのゆくさきとほくなりまさるなかさきてらむ千年のまつ

前中納言定房

神山のみねをさしそふみかさ山いはひそめにしよろつ代のかす

建保四年百首歌に　前中納言定家

うの川いそとらし幾千するのと花のさきこそ我君かみよ

中殿にて花契万春といふことを講せられける時

らま世行になり　後醍醐院御製

時しらぬ花とそみつるさけはわか君の色にそみゆる世のため

永和元年三月卅日松樹春久といふことを講せられ

しけるに　太上天皇

とき色の松のはるかけてかゝることはりも千く万世まて

題しらす　京極前関白太政大臣

君か代はいとゝひさしく成ぬへし千世の松もわか葉さゝり

文保百首歌たてまつりける時　法印定為

行すゑの世にはあらめて我君のあまつひつきはたえしとそ思

題しらす　権大納言具通

男山いはほに残る世のためしかさねていやさかゆるまつ

二条院御製

茜のさすやまとみんいつのあさひのくもりなかれは

応安二年二月廿三日三十首講せられし時寄世
祝　　　　権大納言忠光

久しかれ世にあひてこそせかふとも月やむかしにかはらさる

応安元年九月十三夜池月といふことを講
せられし時席にてつかうまつりて

前関白　良基

千とせをといひそめつる月もかけなくくもらぬ寶家の池水
鶴の子の代々の中は　　前大納言為定

かてあひとそいのりしもわか代さらん君か世の

永徳元年六月十二日三十首講せられし時寄
祝　　　　左大臣

契りあれは御世のためしもかけてみなかけそ代の
寛元々年大嘗会主基方の女楽を給ふに
君の御代ひさしくのみやまきてつかへ奉りし
しるしつかうまつる　常盤井入道前太政大臣
のりともひとつに絶せぬ

後深草院少将内侍

ちよのかけのみ名をはしつけてかはる世のかけをみよる
新国にしるきにおりつるは時をしる
ときそまつるとそ絶みちよにかはらぬ

さゝ竹のふかき　　後伏見院御製

ことしあれはふかきよりそ君か為くれ竹のそのかけは代々を重ぬへし

花園院御製

わか宿にうへてそ見えんくれ竹の千世の世のくれ竹

嘉元百首歌よみてまつりけるに　松

万代そふかみとりなる庭の松千とせを世にまちこそわたれ

後西園寺入道前太政大臣

雑の歌中に　　後二條院御製

たかさこのまつはよそにて見えねとも君か千とせの影そまつらん

亭子院の六十賀に京極御息所のよませてまつりける

内屏風歌　　伊勢

おほかたの年にまれなる千とせへはきみのためとやみさらん

元久二年新古今竟宴の哥

従二位家隆

君ためのはしらの玉のみきりにも千世をつゝるまつの風

文永三年続古今竟宴歌

右近中将具氏

けふやさき代のためしをのこしおく言葉の玉のかすそへなん

後光明峯寺摂政前左大臣

津きせぬせてかきこれはすへらきのなかれの色やまさるとも見ん

永和元年大嘗会悠紀方辰日退出音声歌　千松原

儀同三司

右無是非依所望令書写之者也

ち乃松原